

かけがわ学力向上ものがたり
—我が校のものがたり 実践編—



「茶のみやきんじろう」◦掛川市

令和6年2月
掛川市教育委員会

「子供たちの未来のために」

「ここが分からない。〇〇さん、教えて。」「これがこうだから、こうじゃん。どうかな?」「なるほど。分かった。」「あれ?じゃあここをこうしたらどうかな?」「あ、それもいいね。それでもいいじゃん。」

教室では、子供たちが自分の考えを伝えたり友達のことを聞いたりしながら、様々な問題を解決しようとして一生懸命取り組んでいます。そこには、一人一人の子供の「ものがたり」があります。そして、そのものがたりを支える先生の「ものがたり」もあります。

掛川市教育委員会では、「学力」とは何かを、学校、家庭、地域で共通理解し、どのようにしたら学力の向上が図れるか、その理念や方法等を「ものがたり」としてまとめた「かけがわ学力向上ものがたり」を策定しました。さらに、変化の激しい時代を生きる掛川市の子供たちに付けたい「創像力」「創合力」「創律力」からなる未来を切り拓く「3つの創る力」を令和3年度に策定し、その育成に重点を置きました。

学校では、夢に向かって自ら考え自ら判断し、心豊かにたくましく生きる子供の育成につながるよう、日々の実践の中で、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指しています。本年度も、児童生徒の学習状況に基づいた学校独自の特色ある「我が校のものがたり」を作成し、全教職員が共通理解のもと、「3つの創る力」育成への積極的な授業改善を進めてきました。

この度、本年度の「我が校のものがたり」による実践の中で、特に成果が表れた代表的な実践をまとめ、一冊の本にすることができました。各学校並びに、実践報告を御提出いただいた先生方におかれましては、御多用の中、多大なる御協力をいただき、心から感謝申し上げます。子供たちの実態に応じた素晴らしい実践の数々から、子供たちの充実した学びの姿が想像できます。

今後も、掛川の子供たちの「3つの創る力」育成に向けて、学校、家庭、地域、教育委員会が連携して、子供たちの未来のための教育活動の充実に努めてまいります。

目 次

日坂小学校 武木 愛美	1
深い学びを引き起こす、主体的な学び合いのある授業を目指して	
東山口小学校 池田 健	3
東山口オリジナルピザを作ろう！	
西山口小学校 渡辺 智美	5
みんなでとことんやりぬこう	
上内田小学校 佐藤 学	7
子供が動き出す授業に向けて	
城北小学校 田中 里佳	9
対話を通して学びを深める授業	
第一小学校 山崎 崇斗	11
なぜ？どうして？を大切にして考動する子～情報活用能力の育成～	
第二小学校 鈴木 大介	13
3つの創る力を発揮させる授業づくり	
中央小学校 若林 奏子	15
学びを深める子の育成～子供中心の授業づくりを通して～	
曾我小学校 野口 麻子	17
主体的に学ぶ子を育てる授業づくり	
桜木小学校 田原 園実	19
自ら学ぶ授業を目指して	
和田岡小学校 小長井 奎佑	21
自ら問題解決を図ろうとする和田岡っ子	
原谷小学校 川隅 翔太	23
自覚的に学ぶことができる子	
原田小学校 細野 雅希	25
掛川市で子供を産みたい、育てたいと思う人を増やすには？	
西郷小学校 大池 瑠美	27
自ら学び続ける授業を目指して	
倉真小学校 池田 勇太	29
「～たい」でいっぱい倉真っ子！	

土方小学校	平松 哲也	3 1
目指す授業に向かって		
佐束小学校	深谷 享平	3 3
もし自分なら、日本の工業生産の発展のために何を大事にしたらよいだろう？		
中小学校	加藤 映美	3 5
「創合する」よさって何だろう？		
大坂小学校	鈴木 捺通子	3 7
創立150周年の節目を生かして…		
千浜小学校	富井 美帆	3 9
「じっくり考えやさしく伝え合う子を育成するための教科等指導の在り方」		
横須賀小学校	宇佐美 侑輝	4 1
「誰一人取り残さない教育」		
大淵小学校	浅場 翔太郎	4 3
大松の子、みんながきらっとかがやくように		
栄川中学校	田中 郁美	4 5
学び合い やり抜く 栄中生		
東中学校	大杉 鏡康	4 7
「自主・創造・敬愛」を育む		
西中学校	横井 泰人	4 9
生徒が主役の授業 ～仲間と共に学びを深める力の育成～		
桜が丘中学校	石川 貴昭	5 1
「自分で考えて解決できる桜中生」を目指して		
原野谷中学校	池田 直茂	5 3
原野谷のかしこい生徒は対話でぐんぐん伸びる！		
北中学校	池田 友梨	5 5
追究し続ける 北中生を目指して		
城東中学校	植松 俊紀	5 7
「発信（発進）」「挑戦」～対話を通して考えを深めよう～		
大浜中学校	齋藤 孝浩	5 9
あこがれの人の魅力を伝えよう		
大須賀中学校	鈴木 健吾	6 1
学びを自分の言葉で振り返る		

深い学びを引き起こす、

主体的な学び合いのある授業を目指して

日坂小学校 武木 愛美

1 教員が学ぶ

我が校では、子供たちが「3つの創る力」の育成・発揮をするためには、教員が「3つの創る力」について学ぶことが必要だと考えました。そのために、まず校内研修で県や市の資料を活用したり、校内の人材を活用したりして3つの創る力を学ぶこととしました。この学びが、「主体的な学び合いのある授業」への授業改善のきっかけになると考えたのです。

2 子供たちの姿から学ぶ

つぎに、教員が3つの創る力について理解を深めてから授業の単元構想の中に「3つの創る力の発揮・育成」をする学びを考えました。

3つの創る力の育成・発揮に繋がった姿を紹介します。

3年生の総合的な学習の時間の授業

3年生は、日坂・東山地区のお茶の良さを伝えるために「愛を込めてお茶をいれよう！プロジェクト」を計画しました。「日坂・東山に美味しいお茶があるのにあまり飲まれていないのでは…」という課題から、「愛をこめてお茶をいれれば、きっと飲んでもらえる！」と考えて、このプロジェクトを立ち上げました。そして、「どうしたら、自分たちが愛を込めてお茶をいれることができるか。」という課題意識をもち、3人組でどんな活動をしていきたいかを話し合いました。反転学習で、自分の考えをもち、授業に臨みます。ホワイトボードに互いの意見を書き、どんな活動をどの順番で行っていくか、創像力や創合力を発揮しながら、計画や見通しをもっていきました。



6年生の保健の授業

6年生は、保健の授業で「病気の予防」について学習をしています。家庭学習で資料を読み込み、各自で予防方法や病気の症状、病気の原因等について、各自の考えが共有できるホワイトボードアプリに付箋機能等を使ってまとめていきました。

グループごとのテーマ「感染症のグループ」「生活習慣病のグループ」で学びを進め、説明する人、他グループを聞きに行く人と分かれて学習を展開しています。



グループでの対話が終わった後、自分の生活にどのように生かすか、創律力を発揮しながら各自が考えていきました。

3 研修の成果

今年度は、反転学習に取り組み、授業の中で対話の時間を十分に確保する単元を構想することで、教員がファシリテーターになる時間が増えてきました。

12月に授業公開する機会があった際には、全ての学級で主体的に学び合う姿を示し、「子供たちの対話が活発で、主体的で対話的な深い学びが実践されていた。」「どの学年も対話のツールとして、ICT機器を使用していた。」「デジタル（ICT機器）とアナログ（ホワイトボードや黒板）を子供たちが効果的に使用していた。」と、本校の授業を高く評価していただくことができました。

4 来年度は…

来年度は、より多くの授業の中で、子供たちに学びを委ねることができるようになります。そうすることで、教師主導で学びが進むのではなく、子供たちが学び方や学ぶ道具、話し合う方法を自由に選択する等、子供主体で学びが進む授業が教室で展開され、「3つの創る力」を子供が自ら育んでいくようになるのです。

東山口オリジナルピザを作ろう！

東山口小学校 池田 健

栄川学園では、学園共通の研究テーマ「進んでかかわり学び合う子の育成」に向け、園・各校で年齢や実態に合わせたサブテーマを設定し、それぞれがサブテーマを達成することで、12年間の一貫した学びの完成を目指しています。

東山口小では、「思わず考えたくなる学習問題から対話生まれ、新たな気づきを獲得する授業」をサブテーマに設定し、研究を進めてきました。

5年生の総合的な学習の時間の実践を通して、本校の授業の姿を紹介します。

思わず考えたくなるような学習問題から対話生まれる

「東山口地区の自慢の食はなんだろう？」と子供たちに聞くと、1番に出てきたのは「お茶」でした。3年生の時の総合学習で「お茶」を学習してきたからでしょう。しかし、その後が出てきません。『東山口地区には、お茶以外にどんな食があるのか。』という学習問題が生まれました。

調べてみると、いちごやゆずなど、様々な魅力的な食材が作られていることが分かりました。また、「道の駅掛川」やピザ店「Meech」など、おいしい食を発信している場もありました。それを知った子供たちは、この東山口地区の食をPRしたいという思いをもったのです。

そこで、『東山口の食をどうやってPRするか。』という新たな学習問題が生まれました。「東山口の食のおいしさをポスターにまとめたらどう？」「ちらしに書いて配るのもいいと思う。」と様々な意見が出てくる中で、「せっかく近くにMeechがあるから、東山口の食材を載せたピザを作ったらどう？」という意見に、みんな大賛成。東山口の食と店を融合させ、新たなアイデアを作り上げたのです。まさに、「創像力」を発揮したわけです。



そこから、班ごとにピザを考えました。Meechで売っているメニューを参考にしながら、「ブルーベリーとゆずは合わないと思う。」「だったら、ブルーベリーといちごでどうかな。ベリーとベリーで。」など、自分たちで載せる食材、味付けを話し合い、決めていきました。グループのメンバーと協働していく「創合力」が十分に発揮され、原案が完成しました。

地域の人と関わる中で、新たな気づきを獲得する

そして、子供たちの考えたピザを、Meechのピザ職人、榛葉さんにプレゼンしました。榛葉さんから専門的な意見をいただき、それをもとに何度もグループで話し合いました。困ったときには、自主的にMeechを訪れ、直接相談する姿もたくさん見られました。課題を見つけ、行動し続ける「創律力」、職人さんと協力してよりよいピザを作っていく「創合力」も発揮し、初めにグループで考えたピザからバージョンアップした新たなピザを作り上げることができました。



ピザが完成すると、次は、『どうやってそのピザを地域の人にPRするか。』という学習問題が生まれました。話合いの結果、ピザのちらしやのぼり、CMを作ることになりました。中でも、ピザのCM作りには、JAの所長さんから紹介して



いただいた映像クリエイターに協力していただき、ビデオ撮影から音響、タイムキーパーまですべて自分たちの手で行いました。自分たちで声を掛け合ったり、クリエイターの方と相談したりと、一人一人が「創合力」を発揮し、初めに考えたCMからバージョンアップした新たなCMを作り上げることができました。

できあがったCMを見終わったとき、子供たちから歓声が生まれました。「これをぼくたちが作ったなんて信じられない。」と、大満足の様子でした。このCMは、地域に向けての発表会やJA東山口支所にて公開されました。



地域のよさを再確認



いよいよ、子供たちのピザが売り出される時がきました。子供たちが考えた6つのピザは、すべて完売！食べ終わった人たちから、「おいしい！」「東山口でこんなおいしいイチゴが作られているなんて知らなかった。」「Meechの他のピザも食べたい。」など感想をいただき、『東山口の食をPRしたい。』という自分たちの思いが伝わったことに大満足の様子でした。

「東山口オリジナルピザ」を作るというこの取組は、子供たちが3つの創る力を十分に発揮し、東山口地区の魅力を再発見することができた活動となりました。

みんなでとことんやりぬこう

西山口小学校 渡辺 智美



せんちゃん

西山口小では、「聞いて話してやりぬこう」という研修テーマのもと、先生と子供たちみんなで「聞く」「話す」力をつけるための3つの実践を重ねたみたいだよ。どんなことをやったんだろう。かけがわの3つの創る力ともつながっているんだって。せんだんさんに聞いてみよう。



だんちゃん

子供の姿を思い描き、単元を構想する



せんだんさん

クラスにいるたくさんの子供たちが、「楽しそうだな」「やってみたいな。」と思う活動はどんな内容だろうとまずは先生たちが話し合って授業の構成を考えていったんじゃ。これは「創像力」とつながっておるぞ。まずは、1年生の音楽の授業を見に行ってみようか。



1年生は歌ったり体を動かしたりするのが好きなんだ。いつも元気いっぱいだもんね。だから、「音楽に合わせて・みんなと合わせて」というめあてのもと、歌ったり踊ったりすることをたくさんして「楽しいな、もっとやりたいな」という気持ちと笑顔でいっぱいになるような音楽の授業にしたかったのかな。



それだけではなくて、三文字の「バナナ」や五文字の「オムライス」などの食べ物の言葉を考え、リズムカードを自分の好きな順番に並べたり、友達の言葉と合体させたりして、楽しくリズムを打っていたね。



実際に授業をした先生たちが、感想を述べ合ったり、もっと楽しくなるアイデアを出し合ったりして、授業をさらによくしていこうと頑張っていたんじゃぞ。授業も子供たちに合わせてバージョンアップさせていくことが大事じゃな。



相手の気持ちになって聞こう、話そう



次に、聞いたり話したりする力を伸ばすために、目指すべき姿の教室掲示をして、授業や生活の中で意識して過ごしていたんじゃ。その様子を見てみようか。



これは、6年生の国語の授業だね。「友達の考えを聞いて、感想を伝えるためには、どんなことを聞けばいいのか」を考えているね。そっか、ただ友達の話を聞いて終わりではなくて、聞いた後に「感想」を言わなきゃいけないんだって。



聞いた後にすることがはっきりしているから、何のために聞くのか、どんなふうに聞くといいのか、分かりやすそうだね。これは、「創合力」だね。



写真の子供たちをみると、体が少し前のめりになっていて、聞きたいという思いが伝わってくるようじゃ。

ヒントカード

☆感想を伝えるときに使えたら、すばらしい☆
 (使えたらA) 使えなくても感想を言えたらB) 言えなかったらC)
 ・筆者の主張に対するあなたの(○○さん)の考えは、
 ・あなたが(○○さんが)挙げた事例は、
 ・筆者の意図については、
 ・あなたが(○○さんが)言ったことについて、私は、



感想を言わなきゃいけないけれど、話すのが苦手な子もいるよね。苦手な子も話せたのかな？どうしたのかな？



先生がワークシートに右にあるヒントカードを載せていたんじゃ。これも「創合力」じゃな。これを見ながら、一生懸命話している子が多かったんじゃ。



しかも、感想を伝え終わった後に、自己評価もしていたんだね。最初は、Bの評価だった子も、友達の感想の言い方を聞いて真似してみて、最後にはAの評価に上がった子も何人もいたんだって。すごいね。

リーダーチャートで振り返ろう



このように聞く力と話す力を授業や発表の場を上手に使って、伸ばしていこうとしたんじゃ。月末には、自身の頑張りを振り返っていたんじゃぞ。これが「創律力」じゃ。



教室に貼ってある右の表(高学年)と比べて、できていたかどうかを自分で振り返っていたよね。

聞く	リーダーチャート 3の姿	話す	リーダーチャート 3の姿
に	・相手の方を見てうなずきながら聞く ・内容を理解し、自分の考えと比べて反応する	に	・考えを話せる ・わかりやすい言葉を選んで話す
し	・聞いた内容を話せる ・要点を言える	し	・接続詞の一つは使って話す
や	・感想が言える	や	・調べたことと自分の考えを区別して話す
ま	・簡単なメモがとれる(かじょう書き)	ま	・理由を話せる ・理由(自分の経験)を入れて話す
ぐ	・友達の意見を真似できる ・友達の意見のよいところに気付く	ぐ	・数値、写真、教科書のページを示して話す
ち	・聞きたいことがある	ち	・話しながら、友達の反応を確かめている



今年は、どの学年も「3の姿はクリアできそうだったね。来年は、きっと「4の姿」を目指して頑張っていくんだらうな。



わしも子供たちの成長していく姿が大いに楽しみじゃ。みんなの頑張る姿を、これからも応援していこう!!!

うん!



子供が動き出す授業に向けて

上内田小学校 佐藤 学

一年生の教室から熱のこもった声が聞こえてくる。教室をのぞいてみると、自分の考えをみんなに伝えようとする一生懸命な姿と、机から体を半分以上乗り出して友達言葉に耳を傾ける子供が見える。「伝えたい」という思いと「聴きたい」という思いがそれぞれにあれば繋がり合うことができるということと、子供は本来、自ら進んで学び合う力をすでにもっているということを改めて私たちに教えてくれる。子供を机に留めておくような授業ではいけない。子供が「なぜだろう。」「解決したい。」と自ら動き出し、みんなと進んで問いを深めていくような授業をしていきたい。職員同士でこれまで何度も話し合い、実践を重ねてきたことが今、具体の姿として子供に表れ始めている。

子供の主体性を発揮させる授業

子供が自ら「なぜだろう。」「解決したい。」と主体的に考え始めてしまう授業とはどのようなものだろう。

5年生の社会科の授業では、「米作りの工夫」について子供たちが話し合っている。一枚の写真がテレビモニターに映し出された。その写真には、あえて隠された個所がある。その隠されたものの正体から、農家の方が米作りに込めた「願い」に気付いて欲しいと担任は考えたのだ。「何かを田んぼにまいているよ」「農薬じゃない？」子供たちの頭の中でぐるぐると思考が始まる。その正体は「黒酢」であると聞いて驚く子供たち。「なんで黒酢なの？」「農薬ではなく黒酢にしているのは何か理由があるのかな？」子供たちの中から自然と問いが生まれてくる。子供たちに問題意識が醸成された後、担任から合鴨を使った農法についても紹介される。黒酢での消毒も合鴨を使った農法もお金と手間がかかることなのに、どうして……。 「信念かな。」一人がつぶやく。つぶやきは広がり、全体に繋がっていく。「みんなのためかな。ばあばが言った。お金じゃなくてみんなのため。」「環境にも人にも合鴨にとってもみんなにとって良いんじゃないのかな。」



子供たちはこの授業の間、自分たちで納得できる考えを作ろうと、一生懸命に思考を巡らせていた。

子供に付けたい力を明確にし、その力が授業で育成されるには、どんな教材を、どのようにして子供と出会わせ、向き合えるようにすればいいのか。子供はどんな問いや考えをもち、どのように話し始めるのか。ねらいを明確にした事前の授業構想が、子供たちのもつ「なぜだろう。」「解決したい。」という思いと合致したとき、自然と子供主体の学びが始まるということが、示された授業となった。

子供から生まれる「知りたい」という思いと教師の葛藤

3年生では理科「明かりをつけよう」の授業が行われている。「私はこう考えたよ。」慣れた手つきでiPadを操作し、考えが共有される。先日、行った実験で子供たちは、普段の生活で使用しているものには、電気を通すものと通さないものがあるということを明らかにしていた。「10円玉や1円玉は電気を通したよ。」

「割りばしや定規は通さなかったね。」今日の授業では、その実験結果をもとに、電気を通すものとそうではないものの特徴について考えることをねらいとしている。担任は、その違いについて素材の違いに着目して考えられるようにと、ハサミを用意していた。ハサミは持ち手の部分はプラスチックで、刃の部分は金属でできている。子供たちが分類した電気を通すものと通さないものとの共通点やちがいがから、電気を通すものは金属でできているということに気付かせたいとねらいをもっていった。実験結果を見比べていた子供たちから声上がる。「空き缶は電気を通さないよ。」「通すところもあるよ。」どうやら空き缶についての実験結果が割れたようである。「あたりどころが違うんじゃない?」「空き缶は中が空洞だから・・・」

「プルタブのところはどうか。」子供たちは空き缶について問いを深めていく。子供たちの中にあつた「知りたい」という気持ちに火が付き、思考が加速していく。担任は授業のかじ取りの決断を迫られる。このまま空き缶についての問いを軸に授業を展開した場合、子供たちはどのような学び方をするのか。素材に着目させるために、ハサミについて考えを深められるように授業展開を修正すべきか。教師は葛藤しながら、一瞬一瞬の子供の思考の流れを見取り、判断し、最適な手立てを見つけなくてはならない。「自分ならどうするだろう」

「この授業を子供にとって有意義ものにするには、どのような選択肢があるだろう。」授業を参観していた私たちも息を飲む瞬間だった。



動き出した子供たち

本年度は、子供たちの主体的に学ぶ力をより一層つけていきたいという願いから「自ら学ぶ学習問題」と「みんなと学ぶ交流場面」の二つの柱を軸として授業づくりを行ってきた。それぞれの教室で、子供がもつ「知りたい!」「どうして?」を引き出す授業が担任の授業構想やアイデアによって展開されている。このような、子供も教員も一緒になって脳みそに汗をかくような充実した授業を日々共有していくことが、進んで自分の学びを展開していく子供の姿を育てていくのだろう。

自ら思いを発して、学び出した子供たち。その思いをさらに膨らませ、机や教室を越えて自分の世界を切り拓いていく力へと変えていって欲しい。

子供は動き出している。私たち教員も成長の歩みを止めてはいけない。

対話を通して学びを深める授業

城北小学校 田中 里佳

学びを深めている姿とは？

本校では、「学びを深める～対話を通して～」を研修テーマに実践を積み重ねてきました。子供たちが学びを深めている姿とは、どのような姿でしょうか。城北小では、次のような子供の姿を目指しています。①「学んだことを関連付けている姿」②「自分の思いや考えと根拠を結び付けている姿」③「複数の考えから、より適切なものを判断している姿」④「これまでに身に付けたことを使って、新たなものを創造しようとする姿」。これらは、掛川市で大切にしている「3つの創る力」とも密接に関わっています。以下に、今年度の実践を紹介します。

対話に挑戦！

<4年生 国語科の実践>

「アップとルーズで伝える」の説明文を、どこで「初め・中・終わり」に分けたらよいか、グループで話し合いました。練習教材で学んだことを生かしながら(①の姿)、自分の考えをつくった上で話し合いに臨みました。本文の中から根拠を見つけ、ホワイトボード



にまとめていく過程では、文章をまとめる接続語に着目していきましたが、「このように」のまとめの接続語が、必ずしも「終わり」だけに使われるわけではなく、内容をよく読んでどの部分のまとめか考えることが大切だということを知りました。振り返りでは、本時の学習をこれからの「読み」に生かしていきたいという気持ちの子供たちから表れていました(④の姿)。グループや学級全体での対話を通し、「創合力」や「創律力」を発揮することができた授業でした。

<1年生 算数科の実践>

「ひき算」の学習では、子供たちにおなじみのキャラクター「ミカ茶ん」と「きほくま」の数を比べるということで、どの子も意欲的に学習に取り組んでいました。子供たちは、教師がiPadに配付した画像へ自分の考えを書き込みながら考えました。1年生でも上手にiPadを使い、何度も書き込みながら自分の考えをつくり直し「創像



力」を発揮する様子が見られました（②の姿）。中には友達とやり方を見せ合いながら説明している子もいました。全体で話し合う中で、線をつないでペアを作ると残ったものが「ちがい」だということに気付くことができ、学級全体で「創合力」を発揮していました。

対話のレベルアップ！

<3年生 社会科の実践>

「掛川市の交通事故は、どうしてこんなに減っているのだろう」という学習問題について考えました。事前に家庭学習で、一人一人が自分の考えをつくってきた状態で授業に臨み、グループでの対話の時間をたっぷりとることができました。これまでに学んできた「消防署」と同じように考えられることはな



いか、共通点を見つけたり関連付けたりしながら話し合う様子も見られました（①の姿）。iPadに配付された複数の資料から必要な情報を選び、友達の考えと自分の考えを比べながら、一つのワークシートにまとめることで、考えをより深めていました（③の姿）。多くの場面で「創合力」が発揮されていました。

<5年生 家庭科の実践>

家族のことを考えた、「栄養を意識した、健康・成長・活動につながるおいしいご飯とみそ汁」について考えました。互いの考えをオクリンクで確認しながら、視点を絞って話し合うことで、スムーズな対話が出ていました。これまでに学習した栄



養面に加え、家族の健康や好みを考慮し、さらに友達とアドバイスし合いながらよりよい内容を考えていく過程で「創合力」や「創律力」が発揮されており、まさに「深い学び」につながっていました（①③の姿）。

来年度に向けて

今年度の実践から、子供たちが「対話」によって学びを深めるためには、主体的に考えたい学習問題を設定すること、話合いの時間を確保するために授業につながる家庭学習を取り入れること、ICTを効果的に取り入れていくことなど、工夫できることがたくさんあることを学びました。来年度も「3つの創る力」が発揮される子供たちの姿を目指し、教師みんなで研修を深めていきたいと思ひます。

なぜ？ どうして？ を大切に して

考動する子～情報活用能力の育成～

第一小学校 山崎 崇斗

iPad が や っ て き て 3 年 目 ！

「ミライシードのムーブノートで皆の意見を伝え合いたいな」「iPad を使うと友達の全員の考えが分かって便利だな」

令和3年4月から、市内の全ての小中学校に iPad が導入されて2年が経過しました。子供たちは文房具の1つとして iPad を使用し学びを深めるツールとして活用しています。

教師は子供たちの「なぜ？ どうして？ を大切に して考動（考え行動することの造語）する子」を目指して日々研修を重ねています。以下に今年度の研究をまとめていきます。



ICT を 「 使 う 」 から 「 使 い こ な す 」 へ

令和4年の研究では、効果的な活用方法を見出すために教師の授業力、ファシリテーターとしての出番を中心に研究を重ねていきました。しかし、学習者がICTを「使う」から「使いこなす」へステップアップするためには、iPad の効果的な活用だけでなく、自ら課題を見つけ、探究していくために必要な情報やその集め方を考えたり、集めた情報を整理したりするなど情報活用能力が必要不可欠だと実感しました。

情報活用能力の育成に向けて

児童一人一人に情報活用能力が意識できるようにファイルを配布しました。授業中に教科書、ノートと一緒に机の上に出すように全校で統一しています。授業の活動やめあてが分かると、「今日の情報活用能力は？」と児童から質問があがったり、「今日は収集かな。分析もできそう」「まず計画が必要だね」などのつぶやきがあたりするなど情報活用能力を意識した発言が増えてきました。また、情報活用能力のファイルを積極的に使用し、学ぶ姿が増えてきました。また、6つある情報活用能力の掲示物も全校で統一しています。



情報活用能力を発揮した新たな学び

写真のように情報活用能力の育成に向けて板書や振り返り方法を工夫していくことを通して児童の情報活用能力が高まってきました。今後はさらなる「なぜ?どうして?」を大切にする新たな学びを目指すために子供たち自身が「問いをつくる力」の育成を中心とした探究的な学びを目指していきたいと思っています。

「子供の学びと教師の学びは相似形」と言われています。教員自身も問いをつくる力を研修していき新たな学びをつくりをあげていきたいと考えています。



3つの創る力を発揮させる授業づくり

第二小学校 鈴木 大介

実体験による動機付け

6年生の社会科の授業では「世界の国々の文化や生活の様子」について学習します。本校では「世界の文化と暮らしの出前講座」を行い、実際にアメリカやブラジルなどの日本とつながりがある5カ国の国籍の方が来校され、子供たちはその国の生活や文化について直接お話を伺う機会がありました。「子供ではなく清掃員が掃除をする。」「バイクで登下校をする。」「うさぎやカタツムリを食べる。」など、子供たちは日本とは違う生活の様子に驚いていました。それと同時に、「なぜ日本と違うのだろう。」「他の国も同じような生活をしているのかな。」と新たな疑問を抱いている子供もいました。

今回の講座では、子供たちが自由に質問をする時間を設定しました。相手とのやり取りを通して本物の情報を知り、疑問をすぐに解決できました。実際に話を聞くことで、自分が調べたこと以上の情報を得ることができました。実体験を通して、子供たちの知的好奇心がくすぐられ、「もっと知りたい」という意欲が高まりました。



まとめ、話し合う（創合力）

実体験をした後は、Google ドキュメントの共同編集機能を用いて、各国の情報を共有しました。そして、自分が調べた国の情報を班員に伝え、日本の文化や習慣との共通点や違いをホワイトボードに整理しました。自分の調べた国の情報は、他の班員は知りません。そのため、自分の知っている情報を、責任をもって伝える必要があります。子供たちは iPad に保存した写真などの資料を見せながら一生懸命伝えていました。すると、「あ、地震や津波など自然災害が多いのはこの国も一緒だ。」「ご飯を食べるのは同じだけどバナナもたくさん食べるなんて食文化が違うな。」など気付きが生まれてきます。自分の調べた情報を伝えたら終わりではなく、共有した情報をもとに、自分の考えと比べて、気付いたことを伝え合う。そうした他者との対話を通して、子供たちは学びを深めていきます。

これからについて考える（創像力）

日本との共通点や違いを整理したら、その視点をもとに「他の国の人々と交流する時に、どのようなことが大切か」を話し合いました。国際化が進む現代社会において、異文化への理解や尊重が求められています。子供たちは、ムーブノートへ自分の考えを送り、友達の考えと見比べました。そして、自分が「いいな」と思った考えにはスタンプを押したりコメントをしたりして、互いの意見を価値付けました。また、友達のよい考えを取り入れ、自分の考えを修正する子供もいました。

最初は、外国の文化や生活の様子についてあまり知らなかった子供たちが、今回の学習を通して、「これから相手の文化を体験して理解を深めたい。」「これからは相手の思いを聞いた上で話し合いたい。」という思いを抱きました。事実をもとにこれからについて考えることで、自ら学び、行動し続ける力を高めています。



実践を重ね、広げる

本校では、他者との対話を大切にした授業実践を様々な教科で積み重ねてきました。6年生の外国語では、外国の人が喜んでくれるように外国を紹介するスピーチの内容を考えました。まず、自分で内容を考えたら、相手を変えて何度もスピーチを行います。その中で困ったことを共有し、どうしたらよりよいスピーチの内容になるかを話し合い、自分の表現を見直していきました。4年生の道徳では、困っている人がいる場面で、自分だったらどうするかを考えました。オクリンクを使い、みんなで考えを共有しました。その時、考えを色分けすることですぐに相手の考えとの違いに気付くことができました。その後、互いに質問し合って相手の思いを理解し、そのような場面ではどうすべきかについて考えを深めることができました。このように目的のある対話の場面を設定したり、話し合う手立てを工夫したりすることで授業をより充実したものにする事ができます。

授業実践後は、子供の姿から授業を振り返り、成果と課題、解決策を振り返りシートにまとめました。そして、それを校内研修で報告し、実践を全職員に広めてきました。これからも3つの創る力を発揮させる授業を意識し、日々の授業改善を図っていきます。

学びを深める子の育成～子供中心の授業づくりを通して～

中央小学校 若林 奏子

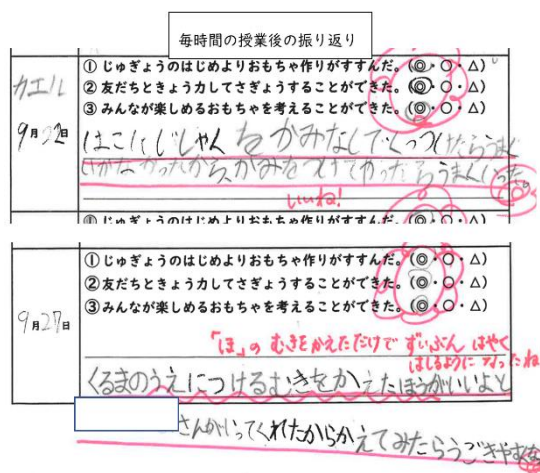
掛川駅近くに中央小という小学校がありました。そこには、優しく、先生の言うことを素直に聞く子供たちと、子供たちが大好きで、一生懸命子供たちに世の中で起きていることを教えようと熱く燃える先生たちがいました。昨今の目まぐるしく変化する世の中に、子供たちが自分たちで考えて対応していくためには、未来を切り拓く力が必要だ！と考えた先生たちは、「授業は教師が教えるもの」から「授業は子供たちが考えるもの」へと変えていこうと考えました。そう考えて、いろいろな挑戦をしてから、月日は3年が経っておりました。

子供中心の学びを実現させるための「単元デザイン」と「単元を貫く課題」

中央小では、授業を考えると、「子供が自分で答えをつくる」姿、「他者と考えながら関わり、自分の考えを少しずつ変える」姿、「学んだことが次の問いを生む」姿、「答えや答えの出し方について、人との違いに価値を置く」姿、の4つの姿を目指しながら、「単元デザイン」をします。その中で、単元ごとに身に付けるべき事項を考えながら、この単元を通してどんな子供に育てたいかを考えて、その単元の中心となる「単元を貫く課題」を設定します。

2年生の生活科では、身近な素材でおもちゃ作りをする単元で、『どんなおもちゃや遊びを発明したらみんなが楽しめるかな』という単元を貫く課題を設定しました。そこには、おもちゃ作りに対して自分が満足してそれで終わりではなく、粘り強く考えて、改良していく子供の姿と、友達ともおもちゃを試作したり、相談したりして、他の意見を取り入れながら改良していく姿を願う教師の思いがありました。そこで教師は「ここをもう少しこうしたら？」と言わず、「あの子も同じようなことで悩んでいたから相談してみたら？」と子供と子供を結び付けたり、材料や安全に配慮した環境を設定したりすることに徹しました。子供たちはいつも単元を貫く課題に戻り、「これなら1年生でも楽しめるかな？」「ルールが分かりにくいかな？」と、より良いものを追究し続ける姿がありました。

また、3年生の算数の、kmを新しい単位として学習する「長さ」の単元では、単元を貫く課題を『3つの場所を回るとき、どのコースが一番短くなるかな』と



し、身近なスーパーマーケットまでの道のりについて考える課題を設定しました。この課題を解決するためには、kmをmに変換したり、長さの計算をしたり、この単元での学習する技能が必要です。子供がすぐに解けそうな問題ではなく、「kmをmにするにはどうしたらいいかな?」「きょりと道のりって違うの?」など、自ら問いをもちながら思考する姿が見られました。

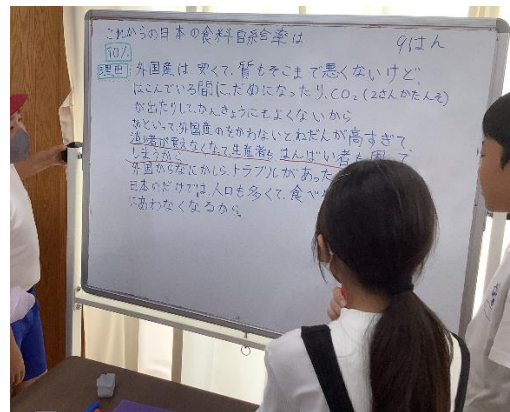
3つの場所を回るとき、どのコースが一番短くなるかな。

	道のり	きょり
中央小 → 遠鉄ストア	250m	250m
中央小 → パロー	1km800m	1km500m
遠鉄ストア → パロー	2200m	1700m
遠鉄ストア → サンゼン	2km300m	1km900m
パロー → サンゼン	3km700m	3km200m

子供中心の学習「知識構成型ジグソー法」

子供中心の学習の形態として「ジグソー法」というものがあります。まず課題について、複数の資料から一つを担当し、その内容についての理解を深めます。そして、別々の資料を担当した人が集まって説明し合い、課題についての答えを作ります。自分の受けもったパートについて責任をもって考える、他のメンバーに説明することを通して、自主的に考える力を高めることができます。

5年生社会科の農業や水産業について学ぶ単元では、『これからの日本の理想の食料自給は?』という単元を貫く課題で、生産者、消費者、販売者の3者からの視点で考えることを、ジグソー法を用いて取り組みました。3者の考えをまとめるとき、今までに自分が考えていなかった視点が入ってくるため、議論したり、また資料に立ち戻ったりと、子供主体で学びをする姿が見られました。



教師は何をするのか?

子供中心の授業づくりを目指してきた中央小。子供たちが対話して思考するグループ学習が中心となってきましたが、教師が「ここはこうだね。」「もう1回、確認するよ!」と、ついついしゃべりたくなってしまっているのが正直なところです。その気持ちをぐっとこらえて、子供が学びたいような学習や環境の設定の工夫、時には、助けが必要な子供へのサポートや、答えを教えることなく、考えを深めるための問いかけなど、教師の出番を考えていく必要があります。子供たちの力を信じて、未来につながる学びを深める、そんな子供たちを育てていくために、中央小の教師は子供中心の授業づくりをこれからも研修していくのでありましたとさ。

主体的に学ぶ子を育てる授業づくり

曾我小学校 野口 麻子

1 3つの創る力とつながる3つの柱

ICTの活用が広がり、子供たちの興味関心が広がったり意見の共有がしやすくなったりしてきたが、本校では、まだすぐにあきらめてしまったり、学びの実感がもてなかったりする児童が多かった。そこで、学びの共同体をもととする「学び合い」を取り入れることにした。

「学び合い」の方法については、学びづくり部を中心に方法を考え、研修では、3つの創る力の「創合力」につながる「課題設定や課題への導き方」や「教師の問い返し」、創像力につながる「学び合いを入れた単元構想」に力を入れて取り組むことにした。またその結果、学びの実感が積み重なり、「創律力」を育てることができると考えた。

2 まずはやってみよう「学び合い」

曾我小の「学び合い」は、とりあえず算数科を中心に、いろいろな教科でまずはやってみようから始まった。低学年はペア、中学年や高学年はグループの形で行い、国語は7分から10分、算数は5分から7分というルールの中で、行っていくうちに、学び合いをすると子供が自分の考えをもてるようになる、学習に前向きに取り組めるようになるとの声が聞かれた。

夏までに行った公開授業の事後研修から、「学び合い」の時間とICTを効果的に取り入れることの関わり、簡単な課題では対話が生まれないので、適度な負荷のあるよい課題を考える必要があることなどに気付いた。そこで、夏季研修では、振り返りの後、9月からの授業でどんな学び合いを取り入れていくか、教材研究をすることができた。また、事後研修でグループ協議したものから、「これからの学び合いで取り組みたいこと」と「課題、気を付けたいこと」を簡潔にまとめて、研修便りで伝えていった。

研修便り

曾我小
主体的に学ぶ子を育てる授業づくり No.5 6月1日

中心授業①では、6年生の学級の雰囲気よさと粘り強く取り組む姿がとても印象に残りましたね。



グループごとの記録から、下記のようにまとめました。これからの授業に生かしていきましょう。

- これからの学び合いで取り組みたいこと
 - ・何でも言える安心感のある雰囲気がある。
 - ・難易度の高い問題には、反転学習を取り入れていくとよい。
 - ・どの子も「解きたい」と粘り強く取り組める課題だった。
 - ・教師の途中的確認は適切だった。
 - ・まとめて、今日できたことを子どもに返したことで、分かったことが実感できていた。

△課題、気を付けたいこと

- ・6+3の図の形を本時の解決の形に近づけたかった。
- ・4/5の大きさを図で押さえておけば、同じ土俵に乗れたのではないかと。
- ・学び合いは、まず自分で問題を解くようにする。グループで話し合ってしまうと発言力の強い子に引っ張られてしまう。
- ・全体で取り上げたときに、グループに返して話し合わせ、理解を深めさせたい。



3 夏季研修での教材研究を生かす

次のステージがスタートし、担任にいつ何の「学び合い」を計画しているかを出してもらい、みんなが参観できる時間をとった。参観授業を見て、有効な「学び合い」だと感じた授業は、次の研修便りで発信した。

また、学びづくり部とのタイアップで、学び合いについて、個人のめあてや学級の目指す授業のめあてにすることで、子供たち自身が自分の学びを見つめるきっかけになっていった。

11月、校内研修の最後となる5年生の公開授業が、静西教育事務所地域支援課による支援研修 B であったため、進捗状況、実態など振り返った。そこで課題として、学び合いのやり方が、提案されている方法と違っている学級があることが分かってきた。研修の度に、学び合いについて教員間で共通理解をする必要があると感じた。そして、教師の適切な問い返しにより、友達に聞いて自分の考えをつくる子供が増え、学びの実感を得ることができつつあるため、「問い返し」についても事後研修で話題にしたいと考えた。

事後研修では、反転学習の適切な利用、必要感から問いを生むことの大切さ、ICTの資料のよさなどが話題になった。また、学び合いのルールや全体共有での教師の切り返しの大切さが課題となった。「創合力」と「創像力」に力を入れた授業となった。

日頃の学び合いの授業より～毎日対話を取り入れていきましょう！



4 次年度に向けての最後のステージ

校内研修は、12月に1年の振り返りをして、次の教育課程に向けて動き出す。その間も授業は日々続いていくので、負担にならない程度に日々意識して取り組んでもらうことが大切だと考える。

最後のステージは「つなげるステージ」、「学び合い」では、友達と自分からつなげる姿を期待したい。また、学びの実感をより得ることができるよう、「学び合い」の振り返りを入れていくことを提案していく。

次年度に向けて、「学び合い」と情報活用能力を効果的に高める授業づくり、対話が生まれる適度な負荷のあるよい課題、学びの実感を得る「学び合い」の振り返りを、どのように研修に重点項目に加えていくか、今後の話合をもとに考えていきたい。曾我小の子供たちも職員も、ぐんぐん伸びる研修にしたいと思う。

学び合いの授業振り返り ()

◎ ○ △で振り返り、次に生かしましょう。

振り返り項目	やってみる	広げる	つなげる
1 学び合いのルールを、子ども達と共有して実践している。			
2 プラン5 8ページ、⑤ステージごとのめざす姿「児童に投げかける言葉」を投げかけている。			
3 積極的に教師が入って問い返しを行い、子どものつなぎ役となる。			
4 2～4人の意図的グループを作っている。			
5 国語5～10分、算数5分程度を意識している。			
6 研修テーマとの関わりを意識して、学び合いを行っている。			
7 国語、算数では、ほぼ毎回学び合いを入れている。			
8 単元の中のどこに学び合いを入れると有効か、見直しをもって単元を構想する。			
9 子どもが考えたいような適度な難易度を設定する。			
10 思考を働かせ、主体的に学ぶための課題への導き方を考えている。			

学び合いのルール

- 1、まずは自分で考えを作る。
- 2、わからなかったら、同じグループの子に聞く。
- 3、聞かれた人は、相手のことを考えながら答える。
- 4、聞いた人は、聞いたことを参考に自分の考えを作る。

自ら学ぶ授業を目指して

桜木小学校 田原 園実

研究主題「自ら学ぶ授業」を目指して、本校では、①子供と共有するルーブリック、②対話したくなる課題設定の2つに力を入れて取り組んでいます。今年度の実践を紹介します。

子供と共有するルーブリックで「自ら学ぶ授業」へ

まず、3年生の実践を紹介します。算数科「円と球」の単元の最後の授業で「マンホールの蓋が円の形をしているのはなぜだろう。」という問いを解決していきます。単元の最後ということもあり、ルーブリックを「マンホールの蓋に円の形が多い理由を円の学習で学んだ言葉を使って説明する。」としました。「円だと、落ちにくい。」「どの向きにしてもすきまがないね。」思ったことを次々に口に出していきます。「角がないけど、授業で覚えた言葉で言うとどうなる?」と、子供たちの学びは、少しずつ今までの授業とつながり始めていきます。ルーブリックによって目指す姿がはっきりしているからこそ、子供たちがそこに向かおうとしていました。



次に、6年生社会科の実践を紹介します。「日本の歴史全国統一への働き」の単元では、学んだことを生かして「誰のどの政策が全国統一に一番影響を与えたか。」を最後の問いにしました。初めに考えたルーブリックは、「自分の選んだ政策についてワークシートにその理由を書いている。」でした。しかし、何を根拠にして考えることが、今までの学びをつなげることができるかと考え、ルーブリックを「自分の選んだ政策について、立場や背景をはっきりさせて、ワークシートにその理由を書いている。」としました。こうすることで、子供たちは、考えを絞ることができました。「商人にとっては～だけ、武士にとっては～だ。」と、違う立場を比較して考えることも見られました。ルーブリックの姿に向かうだけでなく、新たな考えに導き出すこともこの実践から分かりました。



対話したくなる課題設定で「自ら学ぶ授業」へ

まず、2年生の生活科「大きく育て私の野菜」の実践です。この単元では、野菜が変化し生長していることに気づき、野菜の世話を継続していきます。授業で植えた頃の苗と3週間経った苗の様子を比べられるよう「変わってきたのはどんなところかな。」と教師が尋ねます。タブレットで見比べてみると、気づきがたくさん見つかりました。友達のところへ伝えに行くと、友達は大きくなっていることには気付いていますが、何と書こうか迷っています。「葉っぱの数はどう?」「前は6枚で今は10枚になったんだ。」「すごいね。ぼくの苗はね、…。」伝えたいことがあふれてきました。友達との関わりの中で、大きさや数、形、太さを話したり聞いたりすることで、自分の苗のどんなところが変わってきたのかがはっきりと分かり、苗の生長を実感することができました。



もう一つは、4年生の実践です。社会科「自然災害に備えるまちづくり」の単元の導入です。「静岡県でどのような自然災害が起こる恐れがあるのだろう。」この問いに、自分たちの住んでいるところだからこそ、子どもたちは課題を身近に感じ始めました。そこで、もう一つ教師の手立てです。出された意見を「起こる恐れが大きい順にしよう。」というものです。それまで、グループでなんとなく知っていたことを話していた子供たちが、教科書やインターネットで順位の決め手となる情報を集め、話し合い始めました。身近な題材が、子供たちの考えたい思いや解決したい思いにつながった瞬間でした。

桜木小のこれからの「自ら学ぶ授業」

「自ら学ぶ授業」を目指していくのは、これで終わりではありません。ルーブリックを子供たちと教師が共有することで、同じ方向を向いて学ぶことができます。あと少しでルーブリックの姿になりそうだから頑張ってみる、今のままでなくルーブリックの姿に少しでも近づきたい、そんな思いを引き出す力をルーブリックはもっています。また、子供たちにとって身近な課題設定、必要感のある課題設定は、解決したい思いを生み、それが対話したいという思いにつながります。子供たちが、自分たちで課題に向かい解決していく、そんな「自ら学ぶ授業」を目指して、新たな実践を積み上げていきます。

自ら問題解決を図ろうとする和田岡っ子

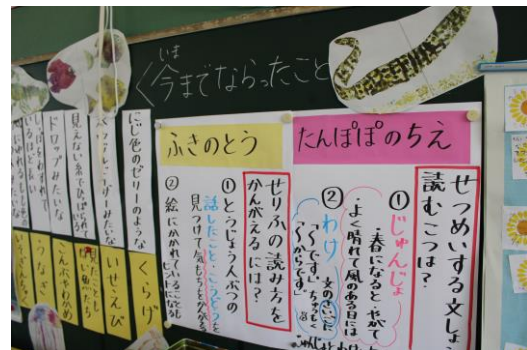
和田岡小学校 小長井 奎佑

和田岡小学校の目指す学び

今年度、授業の子供たちの様子で大きく変わったことは、「それってどういうこと？」や「ちょっと待って！」というような相手の意見を聞いて、自分の意見を伝える姿が見られるようになったことです。それは、子供たちが対話を通して、問いを解決していく経験を重ねてきたからです。和田岡小学校では、1年間、対話を通して問題解決を図ることができるよう取り組んできました。ここでは、そんな姿に向けて、一步ふみだしてきた和田岡っ子の姿を紹介したいと思います。

創像力・創合力を働かせるための武器を手に入れました！

昨年度で、自分の意見を伝えることができるようになった和田岡っ子。そこから、一步踏み出し、課題に積極的に向き合い、他者と協働して問いを解決できるようになってほしいと考えました。そこで、話し合いをまとめるツールや議論を深める資料の提示などを適宜行うようにしました。



ホワイトボードや思考ツールの活用など、教師がその活動にあったツールを子供たちに配付しました。最初は自分達の意見をただ書くだけでしたが、少しずつ班で話し合いまとめた意見を書くようになりました。また、話し合う材料として過去の学びを振り返られたり、必要な資料を読んだりするようにしました。教師が用意した材料を基にグループで問題解決を図り、何度も自分の意見を検討する姿が見られるようになりました。振り返りの時間では、自分の意見を見直し、新たな考えを表現する子も増えました。



話し合いを重ねることで少しずつ自分の意見に自信をもてるようになりました。他グループとの交流時間でも進んで説明することができ、対話や学びを楽しんでいる姿がたくさん見られました。

武器を使って答えを見出す子供達

【授業例①】（創像力をたくさん働かせました。）

5年生理科「ものの溶け方」の単元では、子供たちの「もっと溶かしてみたい。」という気持ちを取り上げ、課題としました。様々な条件を踏まえ、子供たちは自由に実験方法を考え、グループで自分たちの仮説を立証できる実験方法を模索しました。ホワイトボードで班の意見をまとめて他のグループに説明すると、「これってどうなるの?」、「どうしてこういうことをするの?」と自分たちで質問し合いました。授業の終わりには、各グループ、自分たちが考えた実験方法に自信をもつことができました。



【授業例②】（創合力をたくさん働かせました。）



6年生社会「近代国家をみざして」の単元では、「なぜ不平等条約を改正できたのだろうか。」について考えました。その時代にどんなことがあったのか、どんな人が活躍したのかなどを調べてきた6年生。時代背景を確認した後、条約改正に大切だったと思う3つの出来事をあげる活動が行われました。座標軸（思考ツール）を使用し、「憲法をつくったことだよ。」「それよりもこっちだよ。」と話し合う姿がたくさん見られました。友達の発言を理解したり、納得してもらったりするために何度も資料を読む姿は、自分たちで納得解を考えていることの表れです。

来年度の和田岡っ子の姿

自分たちで話し合い、創像力、創合力を働かせ問題解決を図る力が育ってきた和田岡っ子。来年度はもっと子供たちが持っている「解決したい」という思いを大切に、子供たちが見出した課題を自ら解決できるような授業を目指していきたいと考えています。

自分たちで新しい価値を生み出せるよう、探究的な学びが実現できるようにしたいです。



自覚的に学ぶことができる子

原谷小学校 川隅 翔太

自分たちに必要な力は何だろうか？

原谷小学校では、「自覚的に学ぶことができる子」を合い言葉に学習にとりくんでいます。「自覚的に学ぶ」とは、自分の得意や苦手を理解しながら、学習の中で身に付けたい力を考えながら学びを進めることと定義しています。授業の中では、単元で身に付けたい力や、45分間で身に付けたい力についてクラスのみんなで共有することを丁寧に行いながら進めています。

「自覚的に学ぶ」＝けてぶれ

子供たちは自覚的に学べるようになるため、学習を1つのサイクルとして捉え取り組んでいます。その名もけてぶれ学習法です。け＝計画、て＝テスト、ぶ＝分析、れ＝練習となっています。どの子も学習の始めに、「どんな力を身に付けたいか」計画を立てて（け）、自分の実力をテストし（て）、テストした結果、自分の苦手と得意を分析し（ぶ）、それをもとに自分の実力にあった学習の仕方を考えていきます（れ）。一見難しく感じられますが、子供たちは、普段の授業や宿題を通して、このサイクルで学んでいくことを身に付けていきます。



けてぶれ学習ノートの実際の様子

掛川市で子供を産みたい、育てたいと思う人を増やすには？

原田小学校 細野 雅希

「掛川市は大丈夫なの？」少子・高齢化が進み、人口減少社会を迎えている日本の現状を知ったAがつぶやいた。掛川市の現状を調べることから、6年生の社会科「わたしたちの暮らしを支える政治」の学習が始まった。



市議会議員に聞いてみよう！

調べ学習を進めると、掛川市でも40年以上前から少子化が進んでおり、人口減少を抑制し、持続可能なまちづくりを推進していくことが急務となっていることが分かった。では一体、掛川市はそれに対して、どのような対策をしているのだろうか？現職の掛川市議会議員（以下、市議）に直接聞いてみることにした。

市議からは議員の仕事内容を教えていただき、掛川市の直面している少子化問題も詳しく解説していただいた。そこで出てきたキーワードが「722人」。これは、掛川市の2022年の出生数である。「掛川市の出生数722人を増やしたいと思う？キープしたいと思う？」市議の突然の質問に、子供たちは思考を巡らせ、全員が出した答えが「増やした方がよい」。税金や労働力を確保し、掛川市でよりよい生活をしていくには、出生数が増えた方が断然よいと考えたからだ。しかし、出生数を増やすために掛川市もこれまで様々な施策を講じてきたが、まだ解決するまでには至っていないという現状を知った。

すると、市議から「掛川市で子供を産みたい、育てたいと思う人を増やすには、どんな政策を行えばよいか、一緒に考えてほしい。」と提案があった。もし自分が掛川市議会議員だとしたら、どんな施策案を考え、提案すればよいのか…。課題を解決すべく、子供たち新たな学びが始まった。



どんな施策ならば有効なのだろう？

どんな施策を提案すれば子育て世帯が増えるのか、家庭学習で家の人にインタビューしたり、調べ学習をしたりして、iPadに自分の考えをまとめていった。その考えを授業でグループごとの交流活動を行い、考えを深めていった。

班の考えが出来つつあったが、現実的ではない考えも見られた。「本当にその施策案でいいの？」と担任が尋ねると、一気に子供たちの表情が曇っていった。そこで、実際に子育て支援政策を充実させ、成功している4つの地方自治体の施策を参考にしながら、最終的な施策案をまとめていった。

これで解決?!私たちが考えた施策案!!

スライドに考えをまとめ、後日、市議に施策案の発表を聞いていただいた。子供たちが提案したのは、以下の3つの施策案である。



A グループ「ベビー用品再利用 SDGs システム」

使わなくなったおもちゃやベビー用品を回収し、子育て世帯に無料で配布するしくみ。子育て世帯の金銭的負担を減らすとともに、再利用できないものはリサイクルに回し、ごみを減らすことができる一石二鳥の施策。

B グループ「子育て世帯の金銭負担の軽減」

0～15歳までにかかる子育て費用約1900万円の負担を減らすために、給食費・医療費・学費の無料もしくは半額にすることが有効。他の地方自治体では、土木費を子育て支援に回して成功しており、参考になる。

C 「仕事コンビニと放課後クラブ・ありんこランドシステム」

子育て世帯のお母さんが短時間で働くことができるように、「仕事コンビニ」へ行き、草刈りやチラシ配りなどの短時間の仕事を行う。「放課後クラブ」は小学生を対象に、「ありんこランド」は未就学児を対象にして市内住民は無料で使用でき、18:30まで預かってもらうことができる仕組み。子供たちの面倒を見るのは仕事をしたい高齢者の方で、高齢者の社会参画にもつながる。

市議は子供たちの施策案を興味深く聞いてくださり、それぞれのグループの発表に対して以下のように講評をしてくださった。

A	いいところをついている。他の自治体の様子をよく調べています。
B	おもしろい！ユニークな着眼点で、発想がすごくいい。土木費を子育て支援に回している自治体を今後調べます。
C	少子化・高齢化それぞれに対応できて、よくできている案でおもしろい！農業などで観光客の集客などに対して活用できる可能性があります。

発表を終えた子供たちの表情は、「自分たちの考えによって掛川市を変えることができるかもしれない」という高揚感でいっぱいだった。

単元を通して、子供たちは政治を自分ごととして考え、身近に感じる事ができた。掛川市を支えていくのは、主権者である子供たち自身である。自分たちには、掛川市をよりよくしていく力があることを実感できた学びとなった。

自ら学び続ける授業を目指して

西郷小学校 大池 瑠美

西郷小学校では、子供たちが自ら学び続ける授業づくりを通して、「対話によって考えたことを深められる子」の育成を目指してきました。

子供たちが、課題を自分ごととして捉え、自ら学び続ける授業にするには、どうしたらいいのでしょうか。西郷小学校の取組を紹介します。

つきたい力の明確化～何のために学ぶのか～

6年生の「幕府の政治と人々の暮らし」の授業の指導案。この単元で、この1時間の授業で、子どもたちに身に付けさせたい力は何かを考え、目の前の学級の子供たちをイメージしてゴールを設定し、授業を進めます。

西郷小では、「西郷型指導案」を使って書くことで、つきたい力を明確にするようにしています。つきたい力をつけるためには、どんな展開、どんな手立てが必要かを常に意識しながら、授業を組み立てていきます。こうすることで、ぶれない授業、何を学んだのかが子どもにも教師にも分かる授業を心掛けています。

6 幕府の政治と暮らし		幕府の政治と暮らし	
学習目標	学習内容	学習目標	学習内容
1. 幕府の政治と暮らしについて、幕府の政治と暮らしの関係を理解する。	幕府の政治と暮らしの関係を理解する。	幕府の政治と暮らしの関係を理解する。	幕府の政治と暮らしの関係を理解する。
2. 幕府の政治と暮らしについて、幕府の政治と暮らしの関係を理解する。	幕府の政治と暮らしの関係を理解する。	幕府の政治と暮らしの関係を理解する。	幕府の政治と暮らしの関係を理解する。
3. 幕府の政治と暮らしについて、幕府の政治と暮らしの関係を理解する。	幕府の政治と暮らしの関係を理解する。	幕府の政治と暮らしの関係を理解する。	幕府の政治と暮らしの関係を理解する。
4. 幕府の政治と暮らしについて、幕府の政治と暮らしの関係を理解する。	幕府の政治と暮らしの関係を理解する。	幕府の政治と暮らしの関係を理解する。	幕府の政治と暮らしの関係を理解する。

どうする！？創合力発揮！みんなで解決！対話の場

3年生「ポートボール」の授業。自分達のチームの作戦を成功させるためにはどうしたらいいか、みんなで対話しています。白熱した試合が終わり、休憩時間を取る間もなく今度は白熱した対話が始まります。毎時間「試合のよかったところと、直したいところ」と対話の視点を与えることで、お互いのよさやチームの課題を共有しました。



また、iPad やホワイトボードで動きの確認をしたり、作戦を練り直したりし、デジタルとアナログを使いこなして自分達のチームにあった学び方を選びました。

1年生「うみのかくれんぼ」の授業。
この授業では、3匹の海の生き物の中で自分が一番のかくれんぼ名人だと思った生き物と、その理由を伝え合うことを通して、本文の語句を使いながら説明をしたり、感想や質問を言ったりする力をつけていきます。4月よりも教科書の文章量が増えましたが、本文の大事な言葉を鉛筆で囲んだり、メモしたりする姿が見られました。創像力発揮の場面です。

また、子供たちの対話が少し行き詰まってしまった場面では、教師がファシリテーターとして入り、子供たちの対話をサポートします。別の視点で考えることができないうか、他にどんな理由がありそうかなど、再度思考を促すことで、子供たちは再び試行錯誤し始めました。

高学年になると、和気あいあいと自然と始まる対話。事前に家で考えをつくってくる反転学習に取り組むことで、授業は子供たちの対話から始まります。「それってどうなのかな？」と、お互いに課題解決のためにとことん話し合います。解決しようと学び続ける創律力も発揮されています。



来年度にむけて～やってみたい!話してみたい!主体的、対話的に学び合う子の育成～

今年度西郷小では、自ら学び続ける授業作りを目指して取り組んできました。①子どもたちにどんな力をつけたいのか、ねらいを明確にすること、②考えを深めるための発問・対話の場の工夫の2点について研修を深めてきました。その中で、目的をもった対話や既習事項や子どもたちの生活経験と結びつくような対話がより効果的なものになることが分かりました。

来年度は子供同士の対話や関わりを通して、さらに子供たちから「やってみたい!話してみたい!」と主体的に取り組めるような授業を目指したいと思います。

「～たい」でいっぱい倉真っ子!

倉真小学校 池田 勇太

自然に囲まれた倉真小学校。地域との繋がりも多く地域に愛されている学校です。全校58人と小規模ですが、いつも笑顔いっぱい、やる気いっぱいの子供たちです。

授業では、「知りたい」「やってみたい」「解決したい」「話したい」「聞きたい」「教えたい」など、子供たちの「～たい」の気持ちがいっぱいの授業を目指してきました。

6年生国語「説得力のある提案文で倉真小をよりよい学校にしよう」

教師 I 「学校を変える主人公は誰でしょう？そう、みんなです！倉真小をよりよい学校にするための説得力のある提案文を書きます。」

子供たち「けんかなしの学校にしよう。でも、けんかの原因は何だろう？」

「授業中の無駄話をなくそう。どんな方法があるかな？」

「他学年との交流をもっと深めよう。何をしたらいいんだろう？」

魅力的な単元構想が今年度の研修の柱。実際に提案文を実現させることを単元のゴールに設定しました。「自分たちの手でよりよい学校にする」というやりがいのあるテーマにより、子供たちのやる気に火がつけました。説得力が高まるようにアンケートを採ったり、提案内容を精選したり、本気で考え、話し合う姿が見られました。実際に提案文を完成させ、代表委員会で提案し、実現させることができました。



3年生社会「スーパーの秘密を探ろう」

教師 Y 「もし、自分が店長だったら、多くのお客さんに来てもらうためにどんな工夫をしますか。」

子供たち「9人も店長になるの!？」

「駐車場を広くすればたくさんお客さんが入るかも。」

「お母さんはできるだけ安く買いたって言ってたな。」

「店長さんはお客さんの願いを実現しなくちゃいけないから大変だね。」

目指す授業に向かって

土方小学校 平松 哲也

出発！

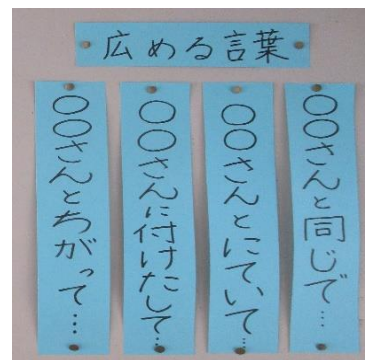
新学期がスタートするにあたり、クラスの目指す授業について学級会を行った。以前から子供たちは、自分たちの授業には限られた人しか発表しない、全体的に発表が少ないという事を課題としていたようだ。そこで、“自分から進んで発表”に決定した。



付け加えて、たくさんの方が発表することでどんな良い効果があるのかを考えた。最後に、自分の考えを伝える力は必要だけれど、クラスの全員が発表することがゴールではなく、それにつながる効果の方を大切にしていこうと確認し、いよいよみんなでこの授業を目指して出発した。

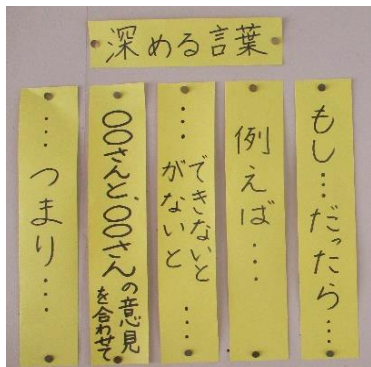
みんなで言葉を集めて

“自分から進んで発表”という授業を目指すために、子供たちの発言で授業が構成されていく話し合い活動を積極的に取り入れていった。道徳や国語だけではなく、どの教科においてもねらいに合わせて、単元計画の中に話し合い活動を位置付けていった。



話し合い活動がスムーズに行くように、まず、その活動の中で使いたい、使うと良い言葉を集めていった。

例年、教師の方から授業で使うとよい言葉について指導し、カードを掲示していた。しかし、それがあまり効果的ではないという反省が多く出た。そこで、本年度は、授業の中で子供たちから出された良い言葉を集めていくようにした。



授業の中で子供たちから出てきた言葉をその都度、教師が取り上げ、価値付けをしていくことで、自然に子供たち自身の意識が高くなり、以前よりも多く良い言葉が聞かれるようになってきた。

自分たちでつなげられる

話し合い活動を続けていくと、小さな成果が見られてきた。発表する子が増えてきたり、集めた言葉がたくさん聞かれるようになってきたのである。

そこで、子供たちに10～15分間の話し合いの時間を与え、子供たちに任せることにした。教師は、何も口出しをせず板書していく。見ていると、話し合いは予想以上につながっていった。それは、友達の意見につなげようとする意識が高くなってきたからだと感じた。それに加えて、自分たちだけで話し合いが進められているんだという達成感を味わっているようである。

そうした中、学級会で話し合いがうまく進み、多くの子供達が意見を発言していることに気が付いた。それは、子供たちにとって話し合う問題が身近であり、より切実さがあるからだと考えられる。お楽しみ会や修学旅行、運動



会、卒業文集などを議題として学級会を積極的に行ってきた。どのような意見で決まっていたのか、誰の意見が納得できたから決まったのか、自分たちの話し合いを分析し次に繋げられるようになった。更に、決まったことを実践することで学級会での話し合いの内容がとても効果的だったことを実感することができた。

教師の手立てで後一押し

だんだんと成果が見られてきたが、子供たちに話し合いを任せても、深まりが感じられなかったり、授業のねらう方向に行かなかったりすることが多くあった。

そこで、深めるための教師の手立てを取ることにした。これは、本校の研修の大きなポイントでもある。具体的な手立てとしては「考える視点」「切り返しの発問」「新しい資料の提供」「意見の比較、分類」「意見の関係づけ」などがある。事前に用意しておくこともあるが、多くは子供たちの話し合いの内容をきっかけに手立てを取っていった。

教師の手立てを受けて、最初は戸惑う子もいたが、粘り強く考え、新たに追究しようとする姿が増えてきた。また、自分の意見を変えたり、友達の意見を付け加えたりする子も出てきた。



“自分から進んで発表”する授業で目指している姿に近づいている。

もし自分なら、日本の工業生産の発展のために何を大事にしたらよいだろう？

佐東小学校 深谷 享平

まずは自分たちの身近な物から考えた！

「ぼくの服はベトナムで作られている。」「わたしはフィリピンだ。」と自分の服のタグを見せ合い児童達がつぶやいた。自分たちの身近な工業製品の服やえんぴつ、上靴等の生産国を調べることから、5年生の社会科「日本の工業生産の今と未来」の学習が始まった。調べていくとAが、「スマホもタブレットもアメリカや韓国等の外国で作られていることが多いけど、このままで日本の工業大丈夫なのかな？」という疑問が生まれた。教師は、右図のような「単元デザインシート」を作成し、「もし自分なら、日本の工業生産の発展のために何を大事にしたらよいだろう？」という単元のゴールの課題を設定した。児童は、自分の服や地元の企業が工業と深く関わっていることを実感しながら、学習を進めていった。

単元のゴール (単元を教く課題)		もし自分なら、日本の工業生産の発展のために何を一番大切にしたらよいだろう				
単元デザイン						
次やまとめ	時	学習内容 (課題 <input type="checkbox"/> ・指導メモ)	対話を通して深める★	和扶 ○・	思判表 ○・	主体的態度○
つかむ	1	山下工業研究所の社長の話から単元の見通しをもって、学習問題を作ろう。P152~155 身近な工業製品について ↑総合・理科・算数・国語「資料を用いた文章の効果を考え、それを生かして書こう」とリンク	★	○		
	調べる	2 日本では、どこでどのような種類の工業製品が生産されているのだろう 機械・化学・金属工業などの重化学工業が日本の工業の中心			○	
		3 日本の工業のさかんな地域や多い工業の種類についてP154 工業地帯と工業地域、太平洋ベルト、中京工業地帯			○	
		4 中小工場と大工場について 大工場と中小工場、高い技術、他の工場との協力	★		○	
まとめる	5 国内の工業生産の現状と変化 生産数、工場の数、外国にある日本の会社の数			○		
	6 なぜ日本の工業を海外に移すのか。 高い技術、環境 国内生産と海外生産、関税、ニーズ、発展、流出			○		
	7 これからの日本に期待される工業製品とは？ 少子高齢化、高い技術、伝統、品質、安全			○		
まとめ	8	もし自分なら、日本の工業の発展のために何を一番大切にしたらよいだろう。	★		○	○
つなげる	本時	A…日本の工業の課題を捉え、多角的（消費者と生産者、日本、海外等）な視点からの根拠をもとに説明している。				
		B…多角的な視点からの根拠をもとに説明している。				
		C…一番大切にしたいことを選んでいるが根拠がない。考えていない。				

日本の現状を調べてみよう！

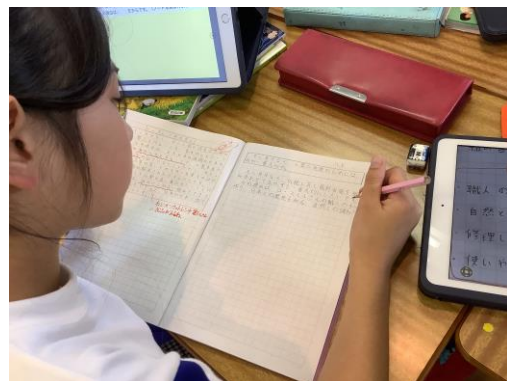
調べ学習を進めると、日本の工業の特徴が分かってきた。「機械工業の生産額が全体の半分近くを占めていて、重化学工業が日本の工業の中心であること」「大工場と中小工場とに分かれていて、工場数の90%以上が中小工場だが、生産額は同じくらいであること」等である。新幹線の先頭部分を作っている町工場の動画を見て、Bは「すごい。日本の技術は世界にも通用しそうだ。もっと中小工場の技術を大切にしたらいいんじゃないかな。」とつぶやいた。また、日本が自動車生産台数が一位だったときの資料を見て、Cは「日本はすごかったんだな。自動車生産をもっと進めたらいいんじゃないかな。」等の単元のゴールにつながる発言をする子も現れ始めた。

日本の工業の良さを見つけていく一方で、課題も見つかった。日本の工場が海外に移転し、電化製品の生産台数がピークの時に比べて、大幅に下がっているのだ。Dは、「これはまずい。もっと作戦を考えないといけないな。なぜ、生産数が減ってしまったんだろう？」とつぶやき、自分事で日本の工業を考えるきっかけになった。（創律力の育成）

日本の工業を発展させるための大作戦！

Eは、根拠をもってみんなに伝えたいと考え、自主的に家庭で学習する姿がみられた。（創合力の育成）

写真のように自分が考えた作戦「伝統工芸と最新技術の融合」「中小工場同士の協力」等について、資料を根拠にして話し合った。また、交流・対話して終わりではなく、話し合ったことで「何が分かったのか」「次は、こんなことをしてみたい」等学びの実感が生まれたり、学習意欲を高めたりすることにつながった。（創像力の育成）



「創合する」よさって何だろう？

中小学校 加藤 映美

教師の願い～考えに「広がり」と「深まり」を～

3年生国語科「ちいちゃんのかげおくり」の授業である。一の場面と四の場面のかげおくりの違いを読み取ることを通して、ちいちゃんの置かれた状況の変化について考える一時間の授業である。担任のA先生は「子供たちが、友達との対話を通して、自身の考えをさらに広げていくことができるように。友達との対話を通して、自身の考えをさらに深めていくことができるように。」と願い、みんなで考えを深め合う時間を十分に確保できるよう「反転学習」を取り入れ、授業を行うことにした。

子供たちは、家庭学習で「一の場面と四の場面のかげおくりの違い」をノートにまとめてきた。「かげおくりをしている人物の違い」に気付いた子、「時間や場所の違い」「声の重なるの違い」といった細かな違いにまで気付いた子等、様々な気付きが見られた。そんな中、児童Bのノートに書かれていたのは「一の場面のちいちゃんより四の場面のちいちゃんの方が大きくなっている」と一文だけ。児童Bは、教科書の本文ではなく挿絵から違いを探してきたのだ。さて、児童Bは授業を通して、自身の考えを広げ、深めていくことができたのであろうか。

子供たちの姿～「新たな気付き」と「本文を根拠に」～

前時に子供たちと作った学習問題「一の場面と四の場面のかげおくりの違いはどこかな。」を投げ掛け、授業がスタートした。子供たちは反転学習で作ってきた自分の考えを次々と発表していく。やはり、自分の考えがしっかりとあることで安心して学習に取り組むことができるのであろう。それぞれの発表に対して子供たちは「似ている！」「同じ！」と反応を返す。しかし、その中には「本当だ！」「あ～、そこは気付かなかった！」といった声も聞かれた。これらの声は、まさに友達のを聞き、新たな考えに出会うことができた子供の姿を表していると言える。



また、友達の考えに「付け足し！それは、教科書の○ページの○行目に書いてあったよ。」と、友達の発表に発言をつなげ、考えを深めていく子供の姿も見られた。「言葉」を大切にする国語科にとって、本文に立ち返ることはとても大切なことである。そして、それ自体が子供たちの考えを深めていく手立てとなる。子供たちは、本文に立ち返りながら、自分たちの考えの根拠を見つけ、自分たちの考えに深まりをもたせていったのであった。



さて、児童Bはどうであったかという点、反転学習で書いてきたノートを基に、隣の友達と考えを伝え合う場面では、友達の考えを聞き「一の場面は、家族四人でかけおくりをして空に浮かんだ。四の場面は一人でやったのに四人写っている」ことをノートに書き加えていった。その後の全体で考えを出し合っていく場面では、友達の「一の場面は墓参りの時にやったかけおくりで、四の場面は防空壕の近くで



やったかけおくりだよ。」という考えを聞くと「場所ね！あんまり気にしてなかった！」と反応を返した。児童Bにとって新たな気づきの連続である。時間の違いを発表した友達の発表には、「一の場面は、出征する前の日だよ。四の場面は、25ページに『夏のはじめのある朝』って書いてあるから、朝だよ！朝だから明るい感じ！」と本文の言葉に立ち返って根拠を付け加えていった。



児童Bもまた、友達の考えを聞くことで、本文の言葉からかけおくりの違いに気づき、自身の考えを大きく広げ、深めていったのだった。

「創合する」よさって何だろう？

A先生の願い通り、子供たちは友達との対話の中で自身の考えを広げ、そして深めていくことができた。「創合力」は、子供たちが新たな考えや気づきに出会える可能性を、そして自身の考えをさらに深めていける可能性を多く秘めている。

「3つの創る力」とされる「創像力」「創合力」「創律力」が発揮させることで、どのようなよさが得られるのか、そしてそれを授業の目標や付けたい力にどのようなように結び付けられるのかを常に考えながら、授業作りを行なっていくことが大切である。

創立150周年の節目を生かして…

大坂小学校 鈴木 捺通子

大坂小学校は、今年でなんと150周年!!その節目を生かして、地域に目を向け、地域の材(人・もの・こと)と関わりながら「自ら考え 主体的・協働的な子」の育成を目指して学習を進めていきました。いったいどんな学習が進められていったのでしょうか。大坂小のシンボルである心の鐘とともに紹介します。

秋をみつけたよ!! (生活科)



1年生の生活科では、**貞永寺**と**居沼池**に秋を探しに行きました。和尚様からどんぐりの話を聞いたり、いろいろな葉っぱや木の実を拾ったりとみんな目をきらきらさせて秋を見つけることができました。

そこから、見つけた秋で遊びたい!という思いを持った1年生。**地域の秋のおもちゃ名人のみなさん**におもちゃの作り方を教えていただきました。こども園の年長さんにもいっしょに楽しんでほしいという願いをもって、「あきのにこにこわくわくランド」を開催しました。



「もっと数を増やした方がいいかな。」「難しいコースと簡単コースをつくったらどうかな。」年長さんに楽しんでもらうために試行錯誤しながら準備をしました。「あきのにこにこわくわくランド」はもちろん大成功!! 1年生もこども園の年長さんもみんな笑顔が輝いていました。

目指せ、大坂小 食マスター!! (総合的な学習の時間)

3年生の総合的な学習の時間では、食マスターを目指して学習を進めました。まずは、社会科の学習とリンクさせながら**食べ物探検**をしました。そこで、どんな食べ物が大坂小学校区でつくられているのか疑問に思った3年生。掛川市のご当地キャラクターが「ちのみやきんじろうくん」であることや藤井聡太さんが掛川市のお茶菓子を食べたニュースを見て、まずは、お茶について調べることに。

本やインターネットで調べたり、お茶工場へ見学に行ったり茶つみ体験・茶もみ体験をしたりして、お茶についてくわしくなることができました。



その後は、お茶以外の特産物について調べることに。地域に足を運んで野菜や果物を実際に見て触ったり、生産者の方にインタビューをしたりと、様々な情報を集めました。どのように・どんな願いを込めて特産物が作られているかを考えることを通して、食マスターになることができました。

大坂小学校区で起きる自然災害から、自分（たち）の命を守ろう!! (総合的な学習の時間)

大坂小学校では、地震が発生したときは、3階に避難します。「地球が動いた日」の視聴や起震車・消火器の体験をきっかけに災害について学ぶ必要性を感じた5年生。市役所の危機管理課の方にも話をうかがいながら学習を進めました。



様々な体験を経て、「減災についてより知りたい。」「自分たちで防災マップを作成したい。」という願いをもちました。「防災」の視点からみると、実際に自分たちの通学路にはどんな危険が潜んでいるのか現地調査をしたり、どのような内容を防災マップに載せるべきかを話し合ったりした5年生。この学習で得た知識は、自分（たち）の命を守るために、必ず役に立つことでしょう。

このように、子どもたちも職員も地域のみなさんに支えられて、生活科・総合的な学習の時間を中心に貴重な学習をすることができました。本物に触れることや地域の人と直接関わり合うことで、「もっと面白いおもちゃをつくりたい。」「生産者の方の願いや努力を知ったから、給食で苦手なものが出てても食べたい。」「命を守るために、防災について知ったことを家族に伝えたい。」等、それぞれの課題について自分の考えをもつことができました。151年目も、自分の課題を見つけ、友達と協力してさらなる発見をしていくことを願っています。

「じっくり考えやさしく伝え合う子を育成するための教科等指導の在り方」

千浜小学校 富井 美帆

じっくり考えやさしく伝え合うために

本校の研修主題は「じっくり考えやさしく伝え合う子を育成するための教科等指導の在り方」です。『課題を見通し、自分の思いや考えをもつこと』『相手意識をもって聞き、自分の考えをわかりやすく伝えること』ができる子供たちの姿を目指しています。そのために、①追究したくなる課題の設定②主体的な聞き手を育てる対話の場の設定③次の学びにつなげるメタ認知の場の設定の3つの柱を中心に授業改善に取り組んでいます。では実際にどのような授業を行ってきたのか、本校の取組を紹介します。

追究したくなる課題を設定

3年1組で行ったのは国語科「こまを楽しむ」の授業です。説明文の学習では、問いと答えを見つけていきます。その中で、問いに対する答えの書き方の工夫に注目して話し合いました。答えを見つけていくと、この説明文では答えとなる文が段落の最初の1文に書かれている



ことに気付きます。そこからさらに、「答えの文章である1文目以外は必要なの？」という新たな課題が生まれました。すると、「だって、逆立ち駒ってどんなふうに実際に回るのか説明しないとよくわからないよ。」「回し方も手で回すのか、他の道具を使うのかわからないよ。」とさらに答えの書かれ方について考えを深めていくことにつながっていきました。また、例に挙げられている駒の順番にも意味があるのかについても考えました。学習を進めていく中で、「これは、どうなるのだろう。」と新たな疑問から次の学習へとつなげていくことができました。

主体的な聞き手を育てる対話の場の設定

6年1組で行ったのは国語科「海の命」の授業です。物語のクライマックスはどこかという学習問題に取り組みました。まず、自分がどの場面をクライマックスと



考えたのかをネームプレートによって表します。そして、子供たちはどうしてその場面をクライマックスと考えたのか、教科書の文章を根拠にして「たいちは冷静だったと書いてあるから、まだそこでは変わっていないと思うな。」「微笑むと

かいてあるからその前に変化したと思うよ。」「大魚は海の命だと思えた。と書いてあるから…。」と自分の考えを伝えていきます。話し合っていくと、さらに「〇〇さんに反対で、一人前の漁師になれないと思った理由がその前の文にあるはずだから…」など賛成や反対意見も伝え合っていきます。また、話し合う中で意見が変わった子がいた場合には、まずはその子がなぜ意見が変わったのかを優先的に聞こうとする子供たちの様子が見られました。自分の意見を伝えたい、相手の考えを聞いてみたいと思う対話の場の設定となりました。

次の学びにつなげるメタ認知の場の設定

1年1組で行ったのは国語科「うみのかくれんぼ」の授業です。はまぐり、たこの隠れ方について学習してきた子供たちが、3つ目のもくずしよいの隠れ方について考えます。同じパターンで取り組んできているため、「今日は、もくずしよいの隠れ方を見つけるんだよね。」と本



時の学習の見通しをもつことができていました。授業の終盤には、「今までののはまぐりやたこと比べて1番隠れ方が上手なのは？」と問いました。すると、「たこは、色を変えるのがやっぱり速かったと思う。」「もくずしよいは、思ったより海藻をつけるのが上手だった。」など、今まで学習してきたことと比べながら、自分の言葉でまとめることができました。さらに、「私は、〇〇の隠れ方を紹介したいな。」と自分の生き物図鑑の作成へとつなげることができました。低学年から、学習してわかったことを振り返り、さらにもっと知りたいことなど次の学びを自分の言葉で書けるように積み重ねていくことが大切だと感じる授業でした。

今後も子供たちが「なぜだろう。」「これならできそう。」「友達の手も聞いてみたい。」と課題を見通し、自分の思いや考えをもち、自分の考えをわかりやすく伝えることができるように、教職員が一丸となって教育活動に取り組んでいきます。

「誰一人取り残さない教育」

横須賀小学校 宇佐美 侑輝

令和5年度の横須賀小学校の教育



自分もみんなも大切にする子

令和5年度の学校教育目標は「自分も みんなも 大切にする子」です。令和4年度に学校教育目標が変わり2年目がスタートしました。子供たちの意識にも「学校教育目標」が浸透して、自分や友達の良さを表現したり、人の考えを一生懸命聞いたりする姿が増えてきました。

授業の中でも、相手の意見に耳を傾け、お互いを大切にしながら学ぶ姿を見ることができました。このように、班や少人数での話合いに積極的に参加している子供がいる一方で、なかなか自分の考えを伝えられない子がいたり、学習の見通しや自分の考えがもてず、周りの子に頼る子供が見られたりしました。

そこで今年度は、みんなが「考えたい、解いてみたい」と思う問題を設定したり、少人数で話し合いをしたり、学んだ内容を自分の言葉でまとめたりすることで、個人の学んだ実感をもたせ、個の学びと集団での学びを密接に結びつけることに重点を置いて取り組んできました。

1 課題や問題の工夫

1つ目の工夫は、「今日やること」、「今日考えること」をみんなが取り組める内容にすることです。子供たちが学びたいと思うことは何だろうと教師が考え、「子供たちの経験したことと関連付ける」「あれ?どうして?と思う現象について扱う」など、子供たちが実感をもてるように単元計画を立てました。iPadを活用して、写真や動画を見たり、実際の物や場面を想定したりと子供たちが実感をもてる準備もしました。

興味をもって取り組むことで、「どうしてだろう?」とつまずいても、「解決したい」「できるようになりたい」という気持ちをもつことができました。また、課題や問題を「自分ごと」として捉えることで、授業で学ぶこと、単元を通して学ぶことを理解できるようになりました。



2 一人学び・話し合いの工夫

2つ目の工夫は、まずは「自分の考え」を表現して、次に「みんなで考える」という、学びの流れをつくり、それぞれの進度や学び方に合わせた授業形態を取り入れたことです。課題や問題が出た時に、「今の自分はどうか考えたか」を大切にしています。この段階では、直接解決にたどり着けない子供もいます。しかし、このつまずきを子供自身が気付くことで、課題解決にたどり着くために、「どんな方法で学べばよいか」「誰に質問をすればよいか」を考えること

また、授業における学習班を全校統一して、3人としたことで、一人一人が意見を述べ、互いの考えの共通点や相違点を捉えながら、課題解決に向かうことができました。自分の考えを周りに広げるためだけでなく、自分の考えを再認識し、より深めることもできました。



3 まとめ・ふり返りの工夫

3つ目の工夫は、授業や単元を通して「どんなことを学んだのか」「どんな場面で生かせそうか」を表現させる工夫です。授業で学んだことを、自分の言葉で表現することで、一人一人が学習の足跡を残し、自らが得た力として、以降の学習に生かすことができることを目指しています。また、学習のふり返しとして、それぞれの学びを実生活に生かす場面を考えたり、今後の学習の見通しを立てたりすることで、「社会生活で生きる力」として身に付けることを目指しています。「買い物をするとき生かせそう」「この方法ならこんな問題でも解けるかも」と学びをつなげている姿を見ることができるようになりました。また、自分の考えや思いを書く力も少しずつ伸びてきています。

これらの工夫を通して、自分の力でまず考えてみる（個の力）と小集団で課題解決に向けたよりよい方法を探し実践する（集団の力）をつけることができました。子供たちも「みんなに自分の考えを伝えたり、みんなの考えを聞いたりしたことで、勉強したことがより深まった」「次の時間にどんな問題が出そうか、どうやれば解けそうか考えることができるようになった」と変化を実感することができているようになりました。よりよい学習のあり方を考え、次年度も「自分も みんなも大切に作る」授業づくりを考えていきたいです。



大松の子、みんながきらっとかがやくように

大淵小学校 浅場 翔太郎

「みなさん、「誰一人取り残さない教育」とは何でしょう？」

「それって全員の学力を上げるってこと？」

「覚えることが苦手な子に丁寧に教えてあげればいいのか？」

「勉強が得意な子へはどうしたらいいのか？」

私たち大淵小を含めた若つつじ学園3校は、令和5・6年度と静岡県の研究指定を受けることになり、教員たちからはこのような声があがった。

“Darehitori Torinokosanai Kyouiku”として目指すものは何か。まるで洋画の字幕翻訳のように、しっかりとくる解釈になるよう、大淵小の教員たちは何度も話し合いを重ねた。そして「誰一人取り残さない教育」≡「自分事として捉え、みんなでつくりあげる学び」を目指し、今年度実践に取り組んだ。

「自分事として捉え、みんなでつくりあげる学び」をめざして

大淵小学校は、ここ数年間、国語科を窓口教科とし、研修に励んでいる。令和2・3年度は説明文、令和4年度は物語文を中心に「根拠」や「理由」を明確にして自分の考えをもつことを大切にしてきた。令和5年度は自分の考えをもつことに加え、自分事として考えを発信したり友達の考えと比べながら聞いたりすることを大切にし、数人の発言で授業を進めていくのではなく、みんなで学びをつくりあげることを目指した。特に、子供たちと学習問題をつくったりゴールの姿をイメージしながら単元計画を共有したりしていくことで、発達段階や学級の色によって異なるが、それぞれのクラスから楽しそうに意見を伝え合う声が聞こえてくるようになった。

One for all, All for one.

一人学びとグループでの学習を繰り返すことで、なかなか自分の考えを書けない子でも、一生懸命取り組み、最後には自分の考えをもつことができてきた。また、もともと自分の考えをもつことができていた子も、一人学びの時間をじっくり取ってからグループでの学びに移ることで、再び個に戻った時に、より深まった考えをもつこともできていた。少々ハードルが高い課題でも、多くの子が自分の考えを書いたり、友達に伝え合ったりする姿が見られ、前向きに学びを楽しむ姿が見られるようになった。

しかし、意見があっても自信がなくて伝えたがらない子も多く、相手に伝えることに対する抵抗をどうなくしていくかが課題として見えてきた。



もちろん、全文が丸ごと捉えられる紙媒体の模造紙、ICT を利用した納得度の提示、計画されたわかりやすい板書、前時までの学習の足跡が残る掲示、子供の考えを知るための座席表、子供たちの関心を引き付けるような身近な話題からの導入 etc…教師の努力なしでは語れない。

ペアでの関わりを活性化し、全体の学びに

そこでペアトークを積極的に取り入れた。あるクラスの実践を見てみよう。

「はい、はい、はい！」

自分の考えを言いたくてたまらない2年生。「ペアで伝え合ってください。」という教師の言葉の後、体の向きをさっと相手の方に向け、友達の考えにうなずきながら聞く姿があった。



これは、アーノルド・ローベルさんの『お手紙』の授業。がまくんとかえるくんがお手紙を待っていた時の気持ちについてワークシートにびっしりと書き、伝えていた。「初めて、親友のかえるくんからお手紙をもらったから、がまくんはうれしくて心がぼかぼかになったんだよ。」

「自分の書いた手紙でがまくんの心がぼかぼかになったから、かえるくんもうれしくなったと思うよ。」

年度初めはなかなか自分の考えがもてない子も、ペアで話をして、人の考えを聞くことで自分の意見をもつことができるようになった。また、学びを見渡すことのできる掲示、子供たちの実態に合わせたワークシート、本文の叙述と子供をつなぐ声掛けや音読など、様々な手立てを講じたことで、子供たちの学びを支援できた。その結果、子供たちが「創合力」や「創像力」を発揮することにつながり、子供たちの授業に向かう姿勢が大きく変わってきたのである。



アンケート結果から見えるもの

国語に関する実態アンケートをとってみると、「国語が好き・がんばっている」という項目に対し、大淵小全体として昨年度1学期末の結果が91%だったのに対して、今年度の1学期末は94.2%と数値が上がった。以前は多くの子が国語に対して苦手意識をもっていたが、授業をみんなで作りに上げることを目指し、子供たちと単元のゴールの姿を共有したり、学習問題を一緒につくったりしたことで、どの子も考えをもつことができるようになり、子供たちが変化してきたのである。

来年度は、県の指定研究の発表を控えている。これからも一人一人が学ぶ楽しさを実感し、みんなで「創像」したり「創合」したりできる教育活動を行っていき、「誰一人取り残さない教育」の実現、「かがやく大松の子」の育成を目指していきたい。



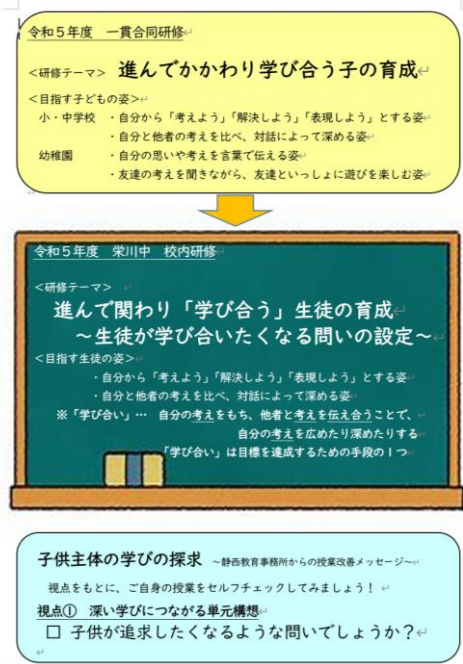
学び合い やり抜く 栄中生

栄川中学校 田中 郁美

緑豊かな自然に囲まれた栄川中学校。学区北部には、「茶」の文字で有名な標高532メートルの粟ヶ岳がそびえています。ここ栄川中学校には、121人の生徒がおり、毎日元気に登校してきます。路線バス、スクールバス、自転車、徒歩、それぞれ交通手段は違えど、学校に登校すればみな同じ1つの目標「学び合い やり抜く 栄中生」に向かって生活します。そして、日々「ものがたり」が生まれています。ここでは、その「ものがたり」の一部を紹介します。

「進んで関わり学び合う子」の育成に向けて

栄川学園では、学園共通の研究テーマ「進んで関わり学び合う子」の育成に向け、各園・校で年齢や実態に合わせたサブテーマを設定し、12年間の一貫した学びを目指しています。栄川中では、「生徒が学び合いたくなる問いの設定」をサブテーマに設定し、「自分から『考えよう』『解決しよう』『表現しよう』とする姿」「自分と他者の考えを比べ対話によって深める姿」を目指し、校内研修を進めてきました。これらの姿を追究することが、「3つの創る力」の育成につながると考えています。



「もっと甘い品種のイチゴを作り、大量に生産するにはどうすれば

よいだろうか？」～3年生理科「生物の成長と生殖」の単元～

単元を貫く問いを「生命はどのようにして成長し、次の世代へと命のバトンを繋いでいるのだろうか？」とし、単元を構想しました。そして、第7時の授業で「もっと甘い品種のイチゴを作り、大量に生産するにはどうすればよいだろうか？」という問いを設定しました。生徒は初めにエキスパートグループで無性生殖と有性生殖について、わからない部分を調べたり互いに確認し合っ



たりし、自分の言葉で説明できるようにそれぞれのエキスパートグループの考えを発言し、様々な視点から問いに対する考えを深めました。互いの説明を聞く中で、「あ～、たしかに！」「甘い物と甘い物を有性生殖させれば必然的に甘くなるのかな…」とつぶやいていました。その姿は、まさに「創合力」を発揮する姿でした。



「自分たちで問題をつくり、計算で直線距離を求めてみよう」

～3年生数学「相似な図形」の単元～

単元を貫く問いを「相似な図形には、どんな性質があるのだろうか？それはどんなところで役立つのだろうか？」とし、単元を構想しました。第13時の授業では、「自分たちで問題をつくり、計算で直線距離を求めてみよう」という問いを設定しました。これまでの数学の授業では、与えられた問題を解く形態がほとんどでした。しかし、この授業では、自分たちで相似が利用できそうな具体物を見つけ、問題をつくりました。生徒は悩みながらも目を輝かせ、相似が利用できそうな物をグループで協力して意欲的に探しました。さらに、それを自分たちの手で計算して直線距離を求めてみると…。「実際の距離に近い数値だね！」「うちの班は全然違う。なんでだろう？」結果に対してなぜそうなるかを必死に考え、話し合いました。



た。生徒の試行錯誤が始まり、もう一度長さを測り直したり計算し直したりする活動を通して、相似な図形の性質を活用し、その意味や数学的な力を発揮していました。まさに、数学の見方・考え方を働かせながら、気づきと改善を繰り返して新たな価値を生み出す「創像力」を発揮する姿が見られました。

進んで関わり「学び合う」教師集団を目指して

昨年度に続き、全職員がそれぞれの教科で「生徒が学び合いたくなる問いの設定」を意識し、授業実践を積み重ねてきました。そして、生徒が学び合いたくなる問いを設定すると、生徒は3つの創る力を発揮しながら自ら学ぼうとします。このような生徒が主人公となり活躍する授業を目指し、今年度の教師の学びをさらに次年度の研修につなげ、「進んで関わり学び合う」ことを大切に、次年度に向け校内研修を進めていきます。

「自主・創造・敬愛」を育む

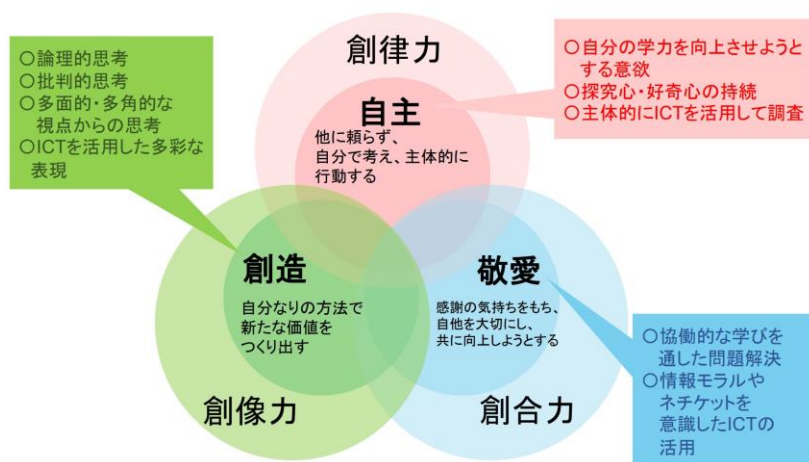
東中学校 大杉 鏡康

子どもたちのものがたり

令和5年度、東中生は大きく成長しました。育成を目指したのは、「自主・創造・敬愛」の三つの資質・能力です。

「自主・創造・敬愛」は本校の校訓であり、この三つの資質・能力を全ての教育活動を通して育成することを目指しています。「自主」は、他に頼るばかりではなく、自分で考え、主体的に行動する力、「創造」は自分なりの方法で新たな価値をつくり出す力、「敬愛」は感謝の気持ちを持ち、自他を大切にし、共に向上しようとする力です。これらは掛川市で育成を目指す三つの創る力、「創律力」「創像力」「創合力」と重なり合うと考えます。

「自分が手伝います！」「それってどういうこと？」「どうしてこうなるのか不思議だな…」「〇〇さんの言いたいことは分かるけれど、でも…」「◇団のみんな、ありがとう！」



授業はもちろん、授業外でも、このような言葉が飛び交う場面が、多く見られました。さすが、「うつくしく、りりしい東中生」です！

このような生徒たちのものがたりの裏側には、こんな大人たちのものがたりが繰り広げられていたのです。

大人たちのものがたり

東中の職員も、生徒に負けないくらいに頑張っています。本校は、掛川市教育委員会『一人一台端末による新たな学び』の教育研究にGIGAスクールとして、3年間の研究に取り組んできました。「自主・創造・敬愛」の資質・能力を育むために



は、どのような授業をすればよいのか、全員で何度も何度も、議論を重ねました。

その結果、①魅力的な問いの設定 ②協働的な学び（学び合い） ③グラグラの種（学びを深化させるICT活用）の三つを掲げた「東中スタイル」の授業を確立することができました。



特に、③の「グラグラの種」は、教科における「見方・考え方」を働かせながら、「発展的」「総合的」に考えを活性化させて、生徒を深い学びに誘うICT活用として、本校の授業づくりの核となる手立てです。

「グラグラの種」は、仲間の考えを瞬時に共有し、考えを深めたり広げたりする「共有」、追い資料を用いてさらに学びを深める「追加」、自分や仲間を、カメラ等を用いて客観的視点の再考につなげるメタの三つのカテゴリーに分けることができます。そこでICTを活用する目的を明確にし、授業実践に取り組みました。

職員の研修での話し合いに耳を傾けてみると…「こうすれば、見方・考え方がより働くのではないかな?」「これは、考え方によっては、共有グラグラではなく、追加グラグラではない?」「あのときの〇〇さんのつぶやきは、授業のねらいに迫ったものだったよ。△△先生の投げかけた補助発問がよかったよね。」

「自主・創造・敬愛」の資質・能力が高められたのは、生徒たちだけではなさそうです。東中のものがたりは、これからもまだまだ続きます。

共有

仲間の考えを瞬時に共有し考えを深めたり広げたりする

グラグラの種

教科における「見方・考え方」を働かせながら、「発展的」「総合的」に考えを活性化させて、生徒を深い学びに誘うICT活用。

追加

「追い資料」を用いて、さらに深い学びに

メタ

自分や仲間をカメラを用いて客観的視点で再考

生徒が主役の授業 ～仲間と共に学びを深める力の育成～

西中学校 横井 泰人

“仲間と共に学びを深める力の育成”を研修テーマに掲げ、“生徒が主役・生徒が中心”を合言葉とする西中学校では、日々“生徒が主役の授業”を実践してきました。今年度は、協働的な学びを構築するために、『魅力的な問い』『形態・場面にこだわる』『教師＝ファシリテーター』『学びをつなぐ家庭学習』『単元構想』の5つを重点としました。それでは、生徒が主役の授業を一緒に覗いてみましょう。



社会科『なぜ中国では多くのものがつくられるのか』

～魅力的な問いで“創像力”を育む～

社会科の佐藤先生の授業では、身の回りにある製品を調べ、Made in Chinaが多いことに気がつきました。そこで、『なぜ中国では多くのものがつくられるのか』という疑問をもち、その理由を考えました。自分が抱いた疑問について追究することができ、“自分ごと”として課題と向き合うことができました。



アジア州の学習では、生徒に『日本の首相はアジアのどの地域からあいさつに行くべきか』という単元を貫くテーマを提示しました。単にアジアの各地域の特色を学習するだけではなく、経済成長した要因や持続可能性についての視点をもつことができ、生徒が学びのつながりを意識して学習を進めることができました。

国語科『3つの謎が表すことは何だろう？』

～仲間と共に“創合力”で挑む～

国語科の中山先生の授業では、『大人になれなかった弟たちに……』から、3つの謎について考えました。「情景描写の謎」は、ヒロユキが死んだあとの空が「高く高く青く澄んで」いるのはなぜなのか…。悲しい心情の時は、雨が降っていたり、曇っていたりするのではないのかと、生徒たちは疑問に思いました。この難題と向き合い、個人追究の時間をとって粘り強く考えましたが、一人ではなかなか答えが見つかりませんでした。しかし、学習班で多様な他者と力を合わせることで、みるみるうちにアイデアが浮かんで、生徒たちは考えを深めていきました。個人追究では、導き出すことが難しい問いだからこそ、仲間と共に様々な視点から見つめ、試行錯誤して最適解を見つけることができました。



数学科『振り返りカードの活用』

～学びのつながりを意識して“創律力”を磨く～

数学科の金田先生の授業では、最後の10分間で『振り返りカード』を記入していました。生徒たちは授業を振り返り、わかったことや疑問、さらに考えてみたいことを、前のめりになって書いていました。

日付	曜日	内容	振り返り		
			わかったこと	疑問	さらに考えてみたいこと
9/1	金	方程式	わ・疑・さ今日はあめ玉17分の重さは何gかを考えました。2つ考え方があって片方は理解できなかったけどもう片方のやり方がよくわからなかったの で、教えてもらって、復習して、わかるようにしたいです。		
9/4	月	方程式	わ・疑・さあめ玉17分の重さは何gになるかを考えました。⑧や式と関連づけよう 団で考えた時はわかったけど、式や数字になるとよくわからなくなったりして、つづいて 考える時に、わからなくなってしまうので、分かるようにがんばりたいです。		
9/6	水	方程式	わ・疑・さ今日は方程式の性質を利用して、方程式を解きました。さのうは全然わからなかったけど さのうよりはわかるようになったのでよかったです。分母で考えるのが、苦手なので、分母 を分母にしておくべきかな、かじりたいです。		
9/8	金	方程式	わ・疑・さ今日は、方程式を簡単にとく法を考えました。やり方は、わかったけど、ど してやるかがよくわからなかったの、移動するとどして符号かわるの かを考えて、わかるようにしたいです。 次の授業で、みんなと確認しよう。		

授業の中で、ある生徒が1次方程式の『移項』を使った解き方を紹介してくれていました。その発表を聞いた他の生徒が、「移動（移項）すると、どうして符号が変わるのかを考えて、わかるようにしたい」と、『振り返りカード』に書いていました。教科担任の金田先生が、すかさず翌日の授業でこのことを話題に挙げると、「たしかに！」と、同じ願いをもった生徒が多く、「なぜ符号が変わるのか」を前のめりに追究していました。生徒の学びから生まれた“問い”を取り上げることで、各々が“自分ごと”としてとらえていました。『振り返りカード』に書かれた生徒の素朴な疑問や問いを取り上げることで、学びのつながりが生まれていました。

家庭学習『花崎ノート』の活用』

～3つの創る力が完成する家庭学習～

先ほどの振り返りを書いた生徒が、『花崎ノート』で移項の復習をし、「なぜ符号が変わるのか」について、自分自身の言葉でまとめていました。

西中学校には、『花崎ノート』という自主学習ノートがあります。やる内容や量を自分で決めて、生徒一人一人が、自身の中にある疑問にとことん向き合うことができます。

教師が指示した内容を、言われるがままに進めていく従来の家庭学習とは異なります。

苦手としているところや、さらに伸ばしたいところを自分のペースで進められるので、学びを調整する力が日々育まれています。

花崎ノート

移項 左辺、右辺にある項を反対側に移動させること。

① $2x+3=5$
 $x-3+5=3+5$
 $x=8$

② $2x+3=5$
 $2x=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

③ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

④ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

⑤ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

⑥ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

⑦ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

⑧ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

⑨ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

⑩ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

⑪ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

⑫ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

⑬ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

⑭ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

⑮ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

⑯ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

⑰ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

⑱ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

⑲ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

⑳ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㉑ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㉒ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㉓ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㉔ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㉕ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㉖ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㉗ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㉘ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㉙ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㉚ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㉛ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㉜ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㉝ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㉞ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㉟ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㊱ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㊲ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㊳ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㊴ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㊵ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㊶ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㊷ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㊸ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㊹ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㊺ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㊻ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㊼ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㊽ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㊾ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

㊿ $2x+3=5$
 $2x+3-3=5-3$
 $2x=2$
 $x=1$

まとめ
 移項は左辺、右辺にある項を反対側に移動させて、その時に符号をかえたくり方で、移項ははじめる。と書いて、やり方を簡単にした。17。

「自分で考えて解決できる桜中生」を目指して

桜が丘中学校 石川 貴昭

はじめに . . .

情報社会が加速し、将来的には今ある職業の半分以上は無くなるだろうと言われている現代。今後必要になってくるのは「与えられた課題をこなす力」ではなく、「今ある課題から新たな課題を見つけ、自分で解決していく力」である。これはその力を生徒に付けてほしい！と願い、日々授業に邁進している、ある中学校の様子である。TさんとIさんの授業風景を一緒に見てみよう . . .

星形の角度の大きさは？～Tさんの数学～

今日は数学の授業だ。今日の課題は「星形多角形の先端の角度の和は？」だ。生徒も問題に向かっていく。これでは今までと同じような勉強じゃないか . . . と思ったら、生徒が立ち上がり友達のところへ寄っていく。「これどうやるの?」「考え方が分からないんだけど」「これはね、こう考えると . . .」



色々なところで生徒が動き、積極的に友達に聞きに行き問題を探そうとしている。聞かれた子も、図にかき込んだり、説明をしたりしながら一所懸命に伝えようとしている！そういえば課題も、単純な星形じゃなくて、不思議な形だった . . . 初めて見る形でも、今までのことが使えないかを確認して取り組んでいたんだな！「これはどうなるんだろう . . .」「やってみたい!」とみんなが取り組めるように考えられていたんだな！次はどんな授業をやるんだろう？もっと複雑な形をやるのかな？それともこの考え方を使って他のことをやるのかな？もっと角を増やしたらどうなるのかな？角の数と角の和には何か法則があるのかな？疑問に思ったことを考えるのって意外と楽しいかも！？

[方針] 周りの三角形から、先端の角だけを残す。

全ての三角形を足すと、以下のように表すことができる。

$$180 \times 14 - 2(a+b+c+d+e+f+g) + J+M+I+L+H+K+G = 180 \times 7$$
$$2520 - 2(a+b+c+d+e+f+g) + J+M+I+L+H+K+G = 1260$$

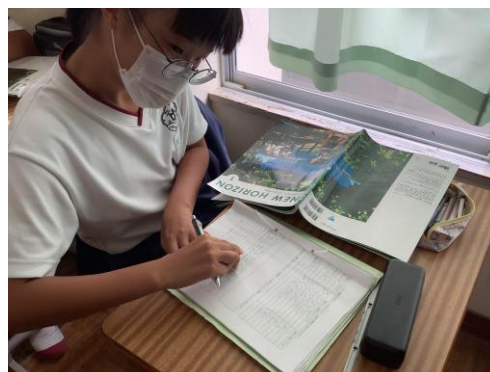
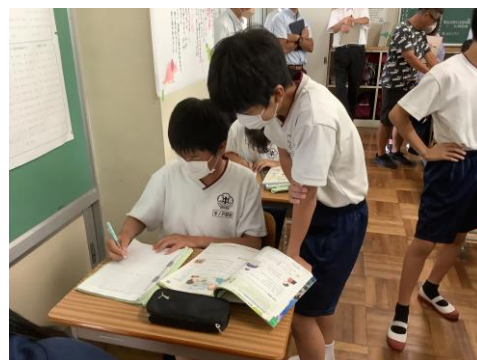
五角形の内角の和は 540° なので、

$$2520 - (2 \times 540) + J+M+I+L+H+K+G = 1260$$
$$J+M+I+L+H+K+G = 1260 - 2520 - (2 \times 540) = 540$$

よって 540°

クラス雑誌を作ろう！～Iさんの英語～

次は英語の授業だ。ここでの課題は「クラス雑誌の友達紹介ページを作るために必要な情報を聞き出し、まとめよう」か。すごく面白そうだし、友達のことを紹介するから、頑張れそうだね！でも、友達の情報を英語で聞き出すのも、それを上手くまとめるのも難しそうだな。あっ！「この表現はどうか？」と友達に確認したり、先生に聞きにいったりしている子がいるよ！やっぱりどの授業でも自分の「分からない」をそのままにするんじゃなくて、自分から聞きに行くことが大切なんだな！あの子は聞いてきた情報を基に、文章でまとめているな！授業の始めに先生が示した、7文以上で、色々な情報を加えた文章を作れるように考えているんだね！みんなのページが合わさったクラス雑誌がどんなものになるか、今から楽しみだ！



これからの授業は・・・

今日は2つの授業を見てきたけれど、他のクラスでも「これはどうなるんだろう？」「面白そうだ！やってみたい！」となる課題が多かったな。この学校では、そうした「生徒が考えたい問」を意識して授業を作っていることが分かったぞ！そうした授業になるように先生たちは毎日一所懸命に魅力ある課題を考えているんだな！そういえば、今日見た2つの授業は、どちらも生徒同士で話し合っって課題を解決しようとする姿が見られたな。自分の力で解決したい人もいれば、友達のを借りて解決する人もいる。色々な学び方があるからこそ、それぞれに合った方法で取り組むことが大切なんだな！自分に合った方法を探してみようっと！

終わりに・・・

より一層「自分で考え解決すること」が求められていくであろうこれからの社会。そのためには「今ある知識をどう活用するか」「仲間とどう協働するか」を考え、その力を鍛えていく必要がある。色々なことを模索して取り組みながら、今日も学校は進んでいく・・・。

原野谷のかしこい生徒は対話でぐんぐん伸びる！

原野谷中学校 池田 直茂

原野谷中学校は研究主題「自ら考え 高め合う かしこい生徒の育成」の3年目。今年度は「対話活動のブラッシュアップ」をテーマに付けた力を確実に付ける対話活動を目指しました。さらに、その授業は3つの創る力をどのように育成するのかという検証の研修も行ってきました。それを生徒の視点で追っていきましょう。

3 本時の目標 関数 $y = ax^2$ の「対応表



応用問題を解いたり解説
求め、直線の式を求める

4 本時の対話

本時はほぼすべてが生徒による対話で班や周囲との情報交換、グラフか
期待したい。また、途中チームを分け
1 た

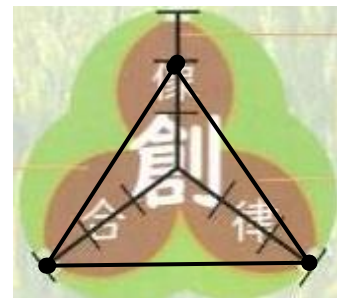
授業案には育成する3つの

創る力のレーダーチャート

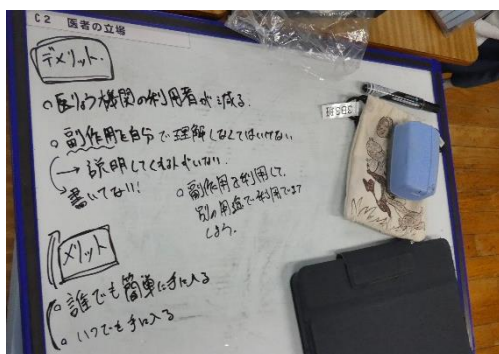
社会科の授業のAさん

最初に「どんなルールがあれば、インターネットで薬を販売できるだろう」と聞かれて自分なりに考えてみた。私は「薬屋に行かなくていいから結構便利かも?」と考えた。でも、医療関係者の立場で調べていくと、「ちょっと待てよ、危険がいっぱいじゃないか?」と考えるようになっていった。

高齢者や過疎地域の人々の立場、忙しい会社員の立場、警察関係者の立場など、いろいろな立場で調べた仲間が集まって対話



この授業のレーダーチャート



を行ったら、本当にインターネットで販売していいのか疑問だらけになっちゃった。グループの仲間と相談して、どの立場の人にも納得してもらえるようなルールを作ってみた。最初に自分で考えたルールとはかなり変わったけど、いいルールができたと思う。

最後に実際の法律を教えてもらって、こうやって法律や決まりはつくられることを知った。

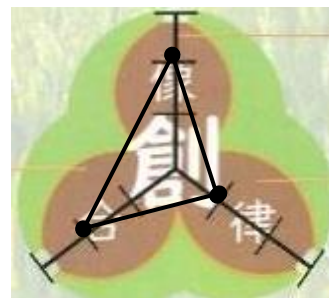


<創律力 UP> 自分の考えや疑問を元に探究する。

<創合力 UP> 対話によって、いろいろな人や立場の意見を聞くことで自分の考えを変化させる。

美術の時間のBさん

天浜線の電車のデザインって何だっけ？普通はオレンジと何色だったっけ？アニメのキャラも走っていたな。全国のいろいろなラッピングデザインされた電車のプリントを班で見たけど、その地域の特色や願い、観光客へのアピールしたい気持ちが



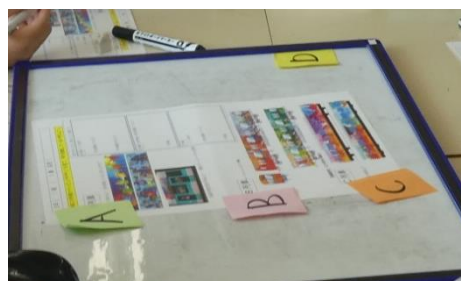
この授業のレーダーチャート



わかるな。

自分がもし掛川地域のよさを伝えるラッピングデザインを作るとしたら、やっぱり掛川城は入れたいな、お茶の緑色を背景にするといいかもしれない。でも、掛川の南部はお茶がさかんなのかな。電車の四角い形を利用すれば、おもしろいデザインになるかも。あまり

細かすぎると遠くから見る人に伝わらないからシンプルな方がいいな。今日出したアイデアを元にしたスケッチを次の時間描きたいな。



<創像力 UP> さまざまなラッピングデザインからアイデアを見つけ、自分のデザインに生かそうとする。

<創合力 UP> 対話によって、誰が見てもわかりやすいデザインの必要性に気付く。

対話は原野谷学園に大きく広がります

来年度から原野谷学園小中一貫校へ向けた取組が本格化します。この原野谷中学校の中だけでなく、もっと広い範囲で、もっとたくさんの人との対話が待っています。対話する相手も、児童生徒の対話だけでなく、地域や教職員同士の対話も増えます。すでに地域の方や原谷小学校、原田小学校との対話がスタートしています。生



徒も教職員もこの3年間の取組で身に付けた対話スキルを生かし、よりより小中一貫校づくりへ進んでいきます。

また、イエナプランなど新しい教育にも取り組んでいきます。

追究し続ける 北中生を目指して

北中学校 池田 友梨

日々変化する社会情勢や予測困難な時代に立ち向かう北中生に対して、自ら課題と向き合い、学びを深め、よりたくましく生きていく力を育てるために、「自ら気づき 考えを深め 追究し続ける」を研修テーマとした北中の研修3年目。深い学びの実現のために、単元・題材構想に力を入れ、単元終了時に目指す生徒の姿を明確にして一つ一つの授業に取り組んできました。集大成の年に、北中生はどのような姿を見せたのでしょうか？

音楽科 「どう歌ったら思いが伝わる？」

北中学校では、10月に『北斗祭』という合唱祭が行われます。本番で素晴らしい合唱を披露することを目指し、どの学年も夏休み前から音楽科の授業で練習を始め、夏休み後は昼休みや放課後練習も行いました。

音楽科の授業では、「歌詞の内容から、場面にあった曲想表現の工夫を考え、歌うことができる」ことを目標とし、練習を積み重ねてきた3年生。翌日に中間発表会を控えたこの日は、「思いが伝わる歌い方の工夫を考える」ことを目標に授業が進められました。まずは、全体合唱を撮影した動画を参考に、パートごとの話し合い活動を通して自分たちの課題を探しました。さらに、授業者の「一番感情が高まる部分ってどこかな？」という問いをきっかけに、歌詞の中で感情を表現する言葉に注目するようになり、一番感情をのせられそうな歌詞を見出だして、どのような歌い方にするかパートの仲間と意見を交わしました。みんなで考え、みんなで歌い方を模索する、「創像力」や「創合力」を発揮する姿が見られました。授業の最後には、「いかりたい」という歌詞のところで感情が爆発しそうな感じで歌うなど、授業の最初より表現豊かに歌いました。

この授業以降も、自分たちの合唱曲と真摯に向き合い練習を続け、北斗祭本番は、どのクラスも聴く人の心を打つ素晴らしい合唱を披露しました。



英語科 「今より互いを知るには？」

北中生は、ALTとの英語の授業をいつも心待ちにしていますが、各学期に一度程度、非常に緊張して授業に臨むときがあります。それは、ALTとの会話テスト。今年度、1年生は各学期に1回ずつ、決められたテーマについて1対1で話すこと

に挑戦しました。2学期（12月）のテーマが伝えられたのは、12月に始まった2学期最後の単元の冒頭の授業。『「冬休みの予定やしたいこと」について質問したり答えたりして会話を続け、互いを知り合う』というゴールが示された瞬間に、生徒たちの「創像力」が発揮され始め、その後の各授業では、自分はどのようなことを話すかを念頭に置きながら学習に取り組みました。教科書の本文から自分のことを伝える文を考えたり、ペアとの会話練習で伝え方を確認したりアドバイスをし合ったりしました。その中で、会話の流れを意識した質問をすることで、やりとりが自然になり、相手の答えを引き出しやすくなるということや、自分の言葉に対してALTがどのような質問をしそうか考えると、会話が円滑に進みやすくなるということに気づきました。

テスト終了後は、6月に行った会話テストの動画と話し方や態度を比較して、良かったところや成長したところ、次回もっと工夫したいところを見つけました。

振り返りでは、「もっとたくさん話したかった！」という言葉や「次は自分からもっとたくさん質問して先生のことを知りたい」という意気込みが聞かれ、次の会話の機会を見据え「創律力」を発揮させていることが感じられました。



てもっと知りたいことがあるから、次は先生に
まねはいてもらってたくさん質問できる
ようにがんばりたい。

次やる時には、動画をもう1度確認してやりたいです。もっと話したかった...

「なぜ？」 「なるほど！」 「もっと知りたい！」

本年度の研修では、「追究し続ける」北中生を目指し、北中の教員はよりよい授業について考えたり、自分が受け持つ授業ではたらかせる見方・考え方や育成する資質・能力とは何かを考えたりして全員で授業に向き合ってきました。特に重点とした単元・題材構想を立てることで、単元のゴールで目指す生徒の姿を想像することができ、一つ一つの授業で身に付けることが分かりました。そして、他教科や過去の学び、一つの単元の中のつながりを生かした学び、そしてこれからのすべての学びが合わさって、より深い学びを実現し、さらなる学びを追究し続ける北中生を育むことができるのではないかと感じました。

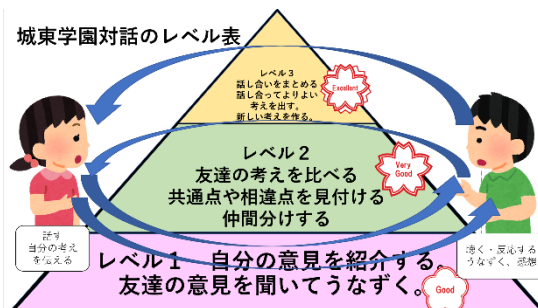
昨年度までの2年間で取り組んだ、生徒自身が考えたいようになるように発問を工夫することや、考えを深められるように対話活動を工夫することで、生徒たちの授業に臨む姿勢は前向きなものになりました。さらに今年度の実践を通して、学びに見通しを持ち、より意欲的に学習に取り組むようになったと感じています。

今後も、単元のゴールで目指す姿を教師と生徒が共有することで、「今日の学び」に意味を見出だし、将来にまで学びをつなげ、地域で光る北中生を育てていきたいと思えます。

「発信（発進）」「挑戦」～対話を通して考えを深めよう～

城東中学校 植松 俊紀

城東中学校の学校教育目標「城東を愛し、未来をたくましく生き抜く子ども」を達成するため今年度は学校活動全体で「発進」「挑戦」をキーワードとして掲げました。そのために教員は研修を充実させ、生徒たちが「対話を通して考えを深める授業」を目指しました。生徒が授業で「発信（発進）」するために対話や教え合いを重視した授業を行いました。また城東学園の一貫教育として教室に対話のレベル表を掲示し、対話の向上を図りました。（右図）変革する教育活動の中で生徒自身が進んで「新しいことに挑戦したい」という気持ちを育めるように生徒会を中心に新たな活動にも挑戦してきました。



生徒の対話が活性化するには ～上越教育大学西川純教授の講話より～

夏季校内研修では、西川教授にリモート講演をしていただきました。生徒の対話も増やすために教員が授業でファシリテーターになる必要性和重要性について詳しく聞きました。生徒の話合いを活性化するためには声掛けのタイミングが大切で、そのタイミングを分かりやすく教えてもらいました。現代社会では少子高齢化が進み地域社会の活動が困難になることが予想されます。義務教育活動期間において主体的活動・話し合い活動が充実することは非認知能力の向上につながり、将来地域社会の中心的な役割を担った時に、地域社会の形成につながる。それがまた現在やっているキャリア教育にもつながることを認識しました。

教師同志の対話を増やす

今年度の取組として職員1人1授業公開を行いました。4人1組の各研修グループに分かれて、お互いの授業を参観しました。教師一人一人が生徒の対話を増やし、主体的な活動となるように意識して授業を行いました。実践例の1つとして国語の「魯迅」の授業では知識構成型ジグソー法を用いて3つの観点のうち1つを分担して意見を述べ合い、その後集約して魯迅が故郷を通して、私たちに伝えたかったことは何かを議論しました。事後研修では、生徒が主体的に対話活動できていた場面や今後の授業改善について活発な意見交換がなされました。



他校とつながる対話 オンラインで遠隔授業

～「法」による、個や社会の「ウェルビーイング」～

3年社会科の授業では、ウェルビーイング（持続的に良好・幸福な状態）について静岡大学付属島田中学校との交流授業を行いました。最初、全体で今までの授業でやってきたことの共有をした後にブレイクアウトルームに分かれてリモート交流活動を行いました。生徒たちは初めて会う生徒にも自分の意見を「発信」できていました。また、他校の生徒の意見を真剣に聞き、自分の意見との相違を検討しながら、ウェルビーイングとは何かについて深く考えている様子が見られました。生徒からは、「緊張したけどしっかりできた」「伝えるにはとても準備がいるけど、その分理解が深まった」という感想が聞かれました。ICT環境が充実してきたからこそできた取り組みであり、職員にとっても「挑戦」でした。普段とは違う人たちに向けて「発信」することは生徒にも大きな刺激となり、考えを深めることができた授業でした。



生徒とともに「挑戦」



夏休みを利用し、生徒代表と職員とで本部役員を含めて校則の見直しについて話し合いました。掛川市で制服が統一されていくなかで、「校則とは何か」について生徒は真剣に考えていました。変化が激しい社会のなかで、マナーやルール、規律について考え大きく変えていく校則の見直しは学校の挑戦でもありました。

また、生徒会の企画として、SDGs週間を設定しました。普段行っているアルミ缶回収で集まった缶をいくつ積み上げることができるか挑戦したり、お茶の葉を使った消臭剤づくりをしたりするなど使い終わったものをどう使うのか身近なものを再利用するのか生徒自身の意識向上に役立ちました。同様に、きとうこども園との交流も活発に行い、体育祭では、園児を招いて、玉入れを行ったり、家庭科の保育実習で交流を図ったりしました。



あこがれの人の魅力を伝えよう

大浜中学校 齋藤 孝浩

協働学習を通じた深い学び

本校では、【協働学習を通じた深い学び】を大きなテーマとし、これに向かうためにすべての教員が1年間をかけて取り組む個別の探求テーマを設定し、公開授業を行っている。本レポートでは、「相手を意識した表現活動の工夫」を探求テーマとして設定した北條教諭による英語の実践を主に紹介する。

自分の“好き”を伝えたい！

今回の授業では、自分が尊敬する人や好きな有名人について紹介する。「近い将来、知り合った外国人と仲良くなるためのお話」という状況設定もあり、生徒は皆、真剣に原稿づくりに取り組んだ。作成した原稿をグループの仲間で見合い、自分の“好き”が相手により伝わりやすくなるように、積極的にアドバイスを求める姿も多く見られた。



文章表現だけでなく、スピーチの仕方でも相手に与える印象が変わることに注目したグループもあり、正しい発音だけでなく、強調して読みたい箇所なども確認していた。

私のスピーチはどんな風に見えるのかな

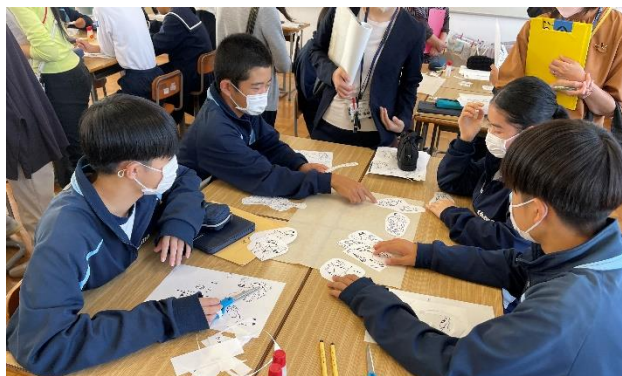
こちらのグループは、発表に向け、リハーサルを行っている。当たり前のように iPad を用いたプレゼンテーションを使い、スピーチをする。自分の様子を他のメンバーにビデオ撮影してもらい、原稿、話し方、目線、プレゼンのタイミングなど、様々な視点で確認していく。ビデオを見ることで自分を客観的に捉えることができ、本番でスピーチを



聞く「相手」を意識することができた。この時の授業は練習までであったが、次の時間の授業では大型テレビを使い、クラス全員の前で堂々と自分の憧れの人について発表をしていた。

まだまだあります。大浜中の実践

上で紹介した実践以外にも、「他者と関わり広がる造形活動の工夫（大和田教諭・美術）」や「協働学習から個の思考を深めるための課題設定（鈴木教諭・社会）」など、魅力的なテーマで日々授業実践が行われている。



あなたの班の鳥獣戯画は？（美術）



今後、EUはどうあるべきだろう（社会）

生徒や教員の持ち味が活かされるような探求テーマが設定されることで、本校の生徒は様々な方法や環境で主体的に協働学習を行うことができている。今後もこうした取り組みを続け、【協働学習を通した深い学び】に繋げていく。

学びを自分の言葉で振り返る

大須賀中学校 鈴木 健吾

主体的な学びを進化させる

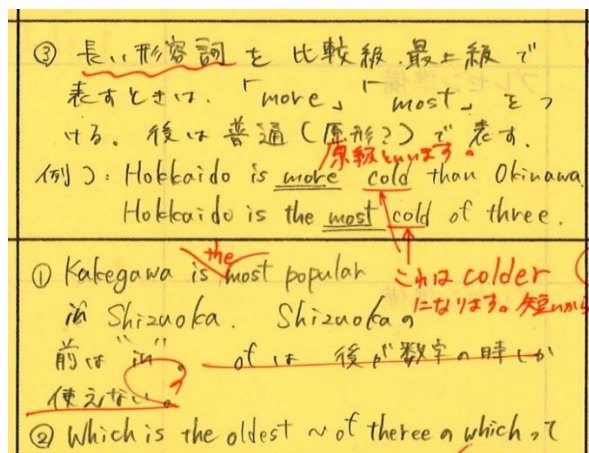
令和4年度から、大須賀中学校は全教員が「生徒が主体的に取り組む授業をつくらう」と研修を進めています。生徒たちの「学びたい」という意欲を引き出すために、生徒が見通しを持ち、学ぶことに対して必要性を感じることができる授業づくり、単元づくりを目指してきました。

令和5年度は、「生徒が主体的に取り組む授業づくり」をさらに進化させるべく、「50分間で何を学んだか」について、自分の言葉で振り返る「振り返りシート」の記述に取り組んできました。

生徒が、教師が、授業を振り返る

令和5年度から、生徒がより主体的に授業に取り組むために、そして学びの定着をさらに高めるために、「振り返りシート」を活用して授業を振り返ることに取り組んできました。振り返りシートには「授業の中で何を学んだか」を自分の言葉で振り返り、まとめます。振り返りシートに記述する時間は、自ら体験し学んだことを「アウトプット」する時間です。学習方法と学習定着度の関係を表す「ラーニングピラミッド」によると、授業を聞いたり教科書を読んだりする「インプット」だけだと、学習定着度は20%程度しかありませんが、他人に教えたりする「アウトプット」をすることで、学習定着度を50~90%程度に高めることができると言われています。振り返りシートの記述には、授業の中で学んだことに加え、新たな疑問が書いてあり、生徒一人一人の学びの様子が表れており、学びをたくさん「アウトプット」することができていました。

また、教師は毎授業後に生徒の振り返りシートの記述を読むことで、生徒が50分間の授業で何をどのように学んだか、見取ることができました。ときには、間違っ理解していることに気付いたり、授業の内容が難しかったのかと反省したりすることもありました。生徒一人一人の学びの様子を振り返りシートを通して確認するこ



とで、教師自身が自らの授業を振り返り、改善することができました。

生徒がもっと主体的に学ぶために

大須賀中学校では、生徒が主体的にそして対話的に学ぶことができる工夫をしています。令和4年度から教室の座席を「コの字型」にしたことで、従来の前向き座席よりも話合いや教え合い活動がより活発に行われるようになりました。また、授業の中で対話的に学ぶ時間を多く設定することで、ペアや小集団による対話活動が活発に行われ



ました。さらに、生徒が「学びたい!」「解決したい!」と感じる学習課題を提示するために、単元構想を練り、生徒の学習意欲の向上を目指しています。

校内研修では、異なる年齢や教科の教員で意図的に3人組をつくり、互いの授業を参観して意見交換を行う「トリオ研修」を実施しました。事後は、様々な立場から生徒がもっと主体的に授業に取り組むために意見を出し合いました。

志を高く、さらなる学びを

授業の「振り返りシート」は、生徒にとっては主体的に50分間の学びをアウトプットする場となりました。教員にとっては生徒一人一人の学びを見取り、授業をより良いものへと改善していくためのツールとなりました。「振り返りシート」は、大中学生の「できた・わかった」感を高め、主体的な学びをさらに進化させました。



大須賀中学校の教員は、「もっともっと生徒の主体性を引き出したい!引き出さなくては!」と、日々志を高く授業づくりに取り組んでいます。令和4年度は「魅力ある単元構想づくり」を、令和5年度は「振り返りシートで更なる学びの定着」を目指してきました。令和6年度も、生徒がより「主体的に学ぶ」ために全職員が一丸となって授業づくりを進めていきます。